

色調は明るい灰色である。27は、口径11.1cm、最大径13.4cm、器高3.8cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部内面には不定方向のナデを施している。色調は明るい灰色である。焼き跡がある。28は、口径11.6cm、最大径14.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く収まっている。調整は回転ナデした後、底部外面には粗いヘラ削りを施している。

第109図29、30は、短頸壺である。29は、口径7.0cm、最大径9.0cm、器高10.6cmを測る。口縁はほぼ直立し、口縁端部は細くそばまる。外面に0.8cmの面をもつ。やや肩部は張り、底は平面に近いがやや丸みを帯びている。底部には回転ヘラ削りを施している。色調は暗い灰色である。30は、口径8.8cm、最大径11.8cm、器高10.7cmを測る。まっすぐのびる口縁で端部は丸く收める。肩はやや張り、底部も比喩的広い。胴部以下は削っている。非常に固く焼きあがっている。

第109図31は、壺である。口縁部は欠損している。残存高14.2cm、頸部最小径3.7cm、胴部最大径9.5cm、底部径4.5cmを測る。底部は平底である。頸部には2条の沈線と波状文を、体部には1条の沈線と刺突文が施されている。調整は体部下半から底部までを回転ヘラ削り、その他は回転ナデである。全体的に丸みを帯びている。大谷編年の出雲3・4期に該当すると考えられる。色調は明るい灰色である。器厚は厚みがある。

第109図32は、長脚無蓋高杯である。口径9.0cm、器高10.8cmを測る。杯部は平らな底部に直立する体部がつくものである。長脚2段3方透かしであり、上段下段とも同方向である。上方透かしが切れ目のみとなり、下段の沈線は省略されている。細い脚柱部から脚端部にかけて強く外反する。脚端部は面をもつがやや丸みをもつ。脚はやや短い。大谷編年の出雲4・9期にみられる型式である。

第113図6は、須恵器大壺である。3号墓の閉塞に用いられている大壺はこの壺の破片のみで行っている。詳細は後述する。

玄室出土遺物（第108図1～3、第110図1～16、第111図1、2）

土師器（第108図3）

第108図3は壺である。口径22.2cm、最大径26.2cm、器高26.4cmを測る。口縁は外反する。最大径は胴部中央付近に位置し、底は丸底でやや尖る。胴部外面は非常に細かいハケ目を、内面には丁寧なヘラ削りを施す。内外面には炭化物が付着している。胴部の器壁は薄く、口縁部はやや厚い、色調は黄灰色である。

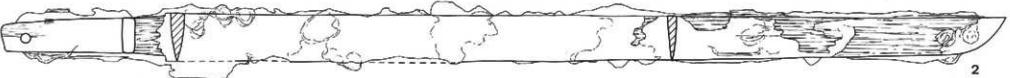
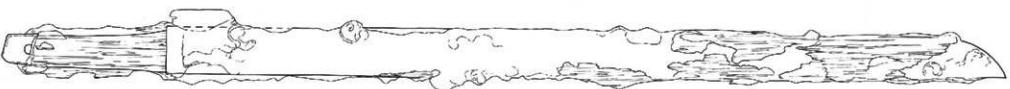
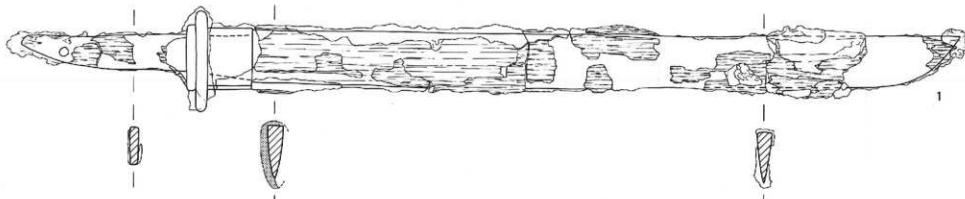
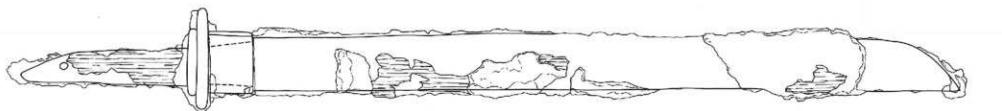
須恵器（第108図1、2）

第108図1は、提瓶である。口縁部は2重口縁で内面が受口状になっているが不明瞭である。口径11.5cm、器高23.8cm、胴部径17.5cmを測る。眼部背面形態は偏平であるが口縁部に対して垂直に面をなす。環状の把手がひしやげて環の孔が小さくなっている。色調は暗い灰色である。

第108図2は、短頸壺である。口径は9.3cm、最大径12.2cm、器高12.2cmを測る。口縁はやや内湾し、端部は丸くおさえる。肩はやや張り、底部は丸底きみである。胴部以下は回転ヘラ削りを施している。非常に固く焼きあがっている。

金属器（第110図1～14）

第110図1～9は、刀子である。1は、切先が欠損している。鋒化が著しい。残存長11.0cm刀身の残存長5.0cm、幅1.4cm、最大厚0.4cmを測る。茎部との境界は両関タイプで幅1.7cm、長さ0.7cmの鉄製ハバ



第111図 Ⅲ区3号横穴墓玄室出土直刀実測図

キ金具がみられる。茎は長さ5.0cm、幅0.9cmを測り、茎尻にむかって次第に幅を細める。目釘は観察できない。茎部には木質がよく残っている。2は、茎が一部欠損している。鋸化が著しい。焼存長9.0cm、刀身の長さ8.3cm、幅1.3cm、最大厚0.4cmを測る。刀身の闊から1cmの所で極端に幅が細くなる。茎部との境界は両闊タイプである。茎は焼存長1.0cm、幅0.9cmを測る。3は、刀身片である。焼存長2.6cm、幅0.1cm、最大厚4.0cmを測る。4は、闊のあたりの破片である。鋸化が著しい。茎部との境界は両闊タイプで、焼存している部分は長さ3.0cm、茎の幅0.3cm、最大厚0.3cmを測る。茎は木管で覆われている。第110図10～13は耳環である。10は、外径の長径が2.9cm、短径が2.6cm、太さが7cmを測る。全体物に鋸化が著しい。11は、外径の長径が2.8cm、短径が2.5cm、太さが6cmを測る。全体に鋸化が著しい。12は、外径の長径が3.0cm、短径が2.8cm、太さが6cmを測る。全体的に鋸化が著しい。13は、外径の長径が3.0cm、短径が2.7cm、太さが6cmを測る。全体的に鋸化が著しい。

第110図14は、鞘尻金具である。第111図2の直刀付近から検出していることから、これに伴うものと考えられる。長茎3.0cm、短径2.0cm、長さ3.0cmを測り薄い鉄板に木質が付着する。レントゲンに2本の釘が写っているが蟹目釘の痕跡と推定される。

第111図1、2は、直刀である。1は、全長49.5cm、刀身の長さ37.0cm、幅3.0cm、最大厚0.8cmを測る。平づくりで切先はフクラ付くのタイプである。刀身全体に木質が残存しており、鞘を装着したままで副葬したものと推定される。茎部との境界は両闊タイプで長径3.0cm、短径2.3cm、長さ2.3cmの鉄製はばき金具・長径5.3cm、短径4.3cm、厚さ0.6cmの鐔・長径3.5cm、短径2.2cm、厚さ0.5cmの銅製の青金具がみられる。はばきのまわりには鞘口金具が付着している。茎は、長さ12.2cm、幅1.9cmを測り、茎尻にむかって次第に幅を細める。目釘孔が2か所観察できる。鋸化が著しい。2は、全長53.0cm刀身の長さ44.8cm、幅2.5cm、量大厚0.7cmを測る。平づくりで切先はフクラ付くのタイプである。刀身全体に木質が残存しており、鞘を装着したままで副葬したものと推定される。茎部との境界は両闊タイプである。茎は長さ8.5cm、幅1.8cmを測り、茎尻にむかって次第に幅を細める。目釘孔が1か所観察できる。鋸化が著しい。

玉類（第110図15、16）

第110図15は小玉である。側面の形状は球形を押しつぶしたような形である。量大径は1.3cm、厚さ0.8cm、孔径0.2cmを測る。メノウ製であり濃緑色を呈す。調整はややあまく、片側から穿孔している。

第110図16は切子玉である。量大径は1.5cm、厚さ2.2cm、孔径0.3～0.1cmを測る。水晶製であり、片側から穿孔している。

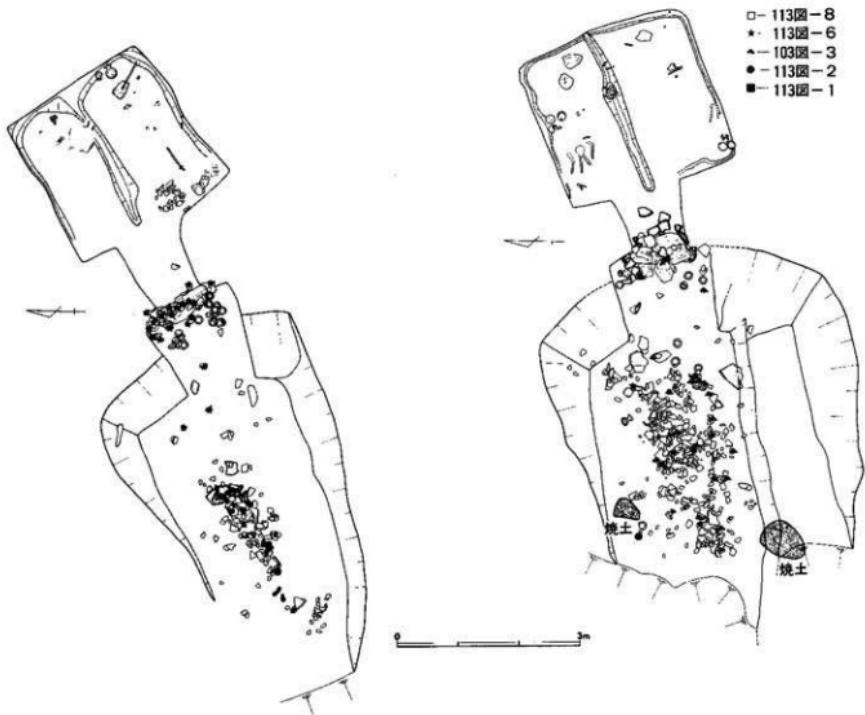
人骨（図2）玄室内から4体の人骨が検出されているが、詳細は、後述する。

2号横穴墓、3号横穴墓出土遺物（第112図）

須恵器の大甕は、2号横穴裏と3号横穴墓で共有するものがあるのでまとめて記述する。

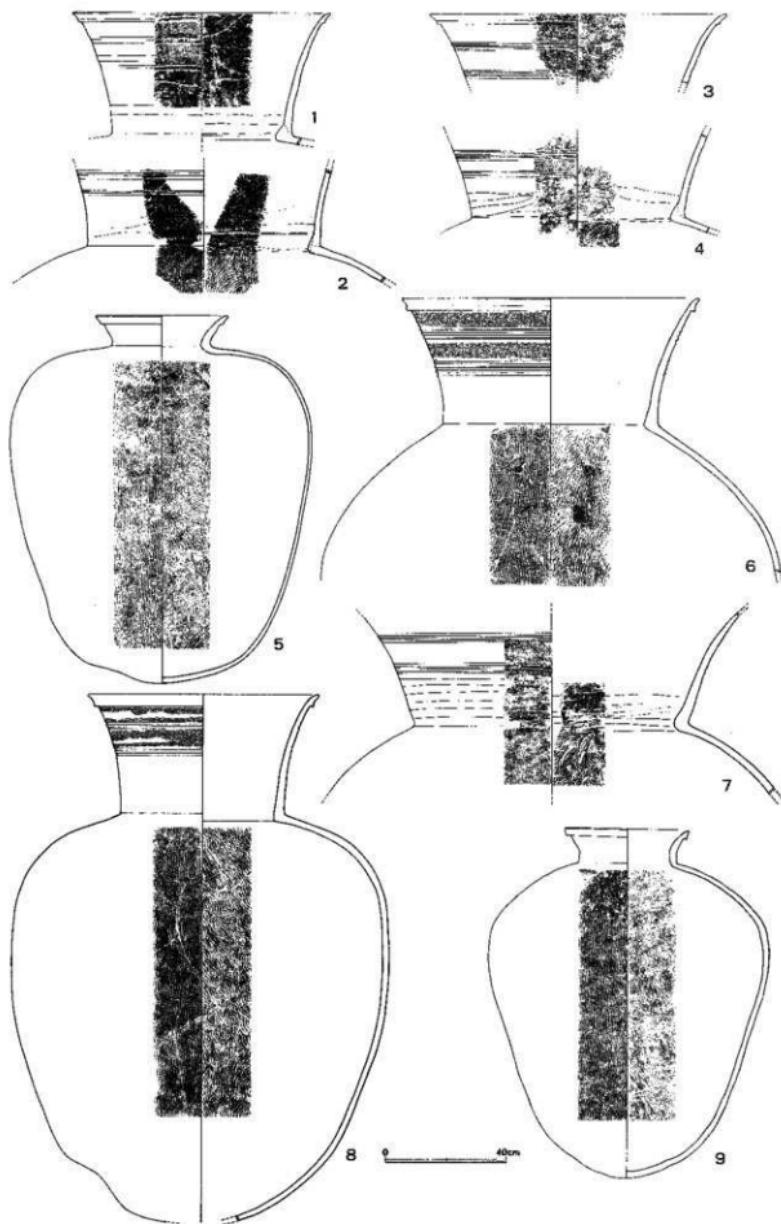
須恵器大甕（第113図1～4、6～8）

1は、2号横穴墓と3号横穴墓の前部第2層から出土した小片を接合し口縁部から頸部まで復元することができた。口縁部外面には2重口縁と2条の四線文に区画された部分に波状文が2条めぐる。口径41.0cm、頸部径28.2cm、残存高22.5cmを測る。肩部外面は格子目タタキを施し、内面には青海波文の当て具痕が残る。色調は外面が暗い灰色であり、内面が灰色である。2は、2号横穴墓と3号横穴墓の前部第2層から出土した小片を密合し、頸部から肩部まで復元することができた。頸部外面には2条



第112図 Ⅲ区2号・3号横穴墓須恵器出土状況相關図

の凹線文に区画された部分に細い波状文が2条めぐる。頸部径38.2cm、残存高21.5cmを測る。肩部外面は格子目タキを施し、内面には青海波文の當て具痕が残る。色調は外面が暗い灰色であり、内面が灰色である。3は、2号横穴墓の前庭部1～3層から出土した小片を接合し、口縁部を後元することができた。口縁部外面には2重口縁と2条の凹線文に区画された部分に波状文が2条めぐる。口径50.0cm、残存高15.0cmを測る。色調は外面が暗い灰色であり、内面が灰色である。4は、2号横穴墓前庭部2層から出土した小片を接合し、頸部から肩部まで後元することができた。頸部外面には2条の凹線文に区画された部分に細い波状文が2条めぐる。頸部径35.4cm、残存高18.0cmを測る。肩部外面は格子目タキを施し、内面には青海波文の當て具痕が残る。色調は外面が暗い灰色であり、内面が灰色である。6は、2号横穴墓の閉塞に用いられたものである。2号横穴塞と3号横穴墓の前庭部からも出土している。ほとんどが閉塞に用いられている。前庭部のものは小片である。接合し口縁部から肩部まで復元することができた。口縁部外面には2重口縁と2条の凹線文に区画された部分に波状文が2条めぐる。肩部はあまり強らない。口径49.0cm、頸部径36.0cm、残存高48.0cmを測る。肩部外面は格子目タキを施し内面には青海波文の當て具痕が残る。7は、3号横穴墓の前庭部第1層から第2層で出土した小片を接合し頸部から肩部まで復元することができた。頸部外面には2条の凹線文に区画された部分に細い波状文が2条めぐる。頸部径45.0cm、残存高29.0cmを測る。肩部外面は格子目タキを施し、内面には青海波文の當て具痕が残る。8は、2号横穴墓の閉塞に用いられたものである。2号横穴塞と3号横



第113図 西区2号・3号横穴墓出土須恵器実測図
(1・2・6・8 2号-3号横穴墓接合、3・4・5 2号横穴墓出土、7・9 3号横穴墓出土)

穴墓の前庭部からも出土している。ほとんどが閉塞に用いられている。前庭部のものも比較的大きい破片である。小片を接合したが、胴部の1/2を欠く。口径38.0cm、胴部最大径62.4cm、器高88.5cmを測る。底部は若干歪んでいる。頸部面には2条の凹線文に区画された部分に細い波状文が2条めぐる。胴部外面は格子目タタキを施す。内面には青海波又の当て具痕が残る、色調は灰色である。

須恵器壺（第113図5、9）

5は、2号横穴墓前庭部から出土した小片を接合したが、ほぼ完形まで復元することができた。口縁部が短く、胴部が倒卵形を呈する壺である。口径20.3cm、肩部最大径46.6cm、器高57.7cmを測る。底部は若干歪んでいる。胴部外面は格子白タタキを施す。内面には青海波横文の当て具痕が残る。自然釉が付着している。色調は灰色である。9は、3号横穴墓前庭部から出土した小片を接合し3/5まで復元することができた。口縁部の短い胴部が倒卵形を呈する壺である。口径20.3cm、胴部最大径46.6cmを測る。底部は若干歪んでいる。胴部外面は格子目タタキのあとカキ目調整を施す。内面には青海波文の当て具痕が残る。上半には自然釉が付着している。色調は灰色である。

上記の大甕、壺の出土位置を整理すると、

2号横穴墓のみから出土しているもの	3・4・5	(大甕2点・壺1点)
3号横穴墓のみから出土しているもの	7・9	(大甕二点・壺二点)
2号横穴墓と3号横穴墓で共有しているもの	1・2・6・8	(大甕4点)
※2号横穴墓を閉塞しているもの	8	
3号横穴墓を閉塞しているもの	6	

ということになる。隣あう横穴墓の同士で遺物を共有する。しかも、閉塞に使用した大甕が隣の横穴墓の前庭部から出るという出土状況は、横穴墓の墓前祭祀の手順や墓群内の相互関係を考えるうえで貴重な資料といえるだろう。

同一横穴墓群内の横穴墓同士で須恵器を共有する例としては、大分県中津市上ノ原横穴墓群、鳥取県米子市陰田横穴墓群などが知られている。今後、類例の調査検討を要する。

出土遺物から當まれた時期を推定すると、2号横穴墓3号横穴墓ともに大谷編年の出雲4期に相当するものと考えられる。古墳時代後期に屬し実年代で表すとおよそ6世紀末ごろということにならうか。遺物、構造の検討からは、追葬の回数、時期までは知り得なかったが、少なくともこの比較的短期間のうちに一連の葬送行為が行われたと考えられる。

4号横穴墓（第114図）

4号横穴墓は、2号、3号横穴墓と尾根を挟んで反対側に位置している。この横穴墓は、南東に開く谷の東側斜面の標高32m付近に穿たれている。この斜面からも、見晴らしさは、さほど良くない。この横穴墓の北東には、後述する小規模な5号、6号横穴墓が隣接して存在している。

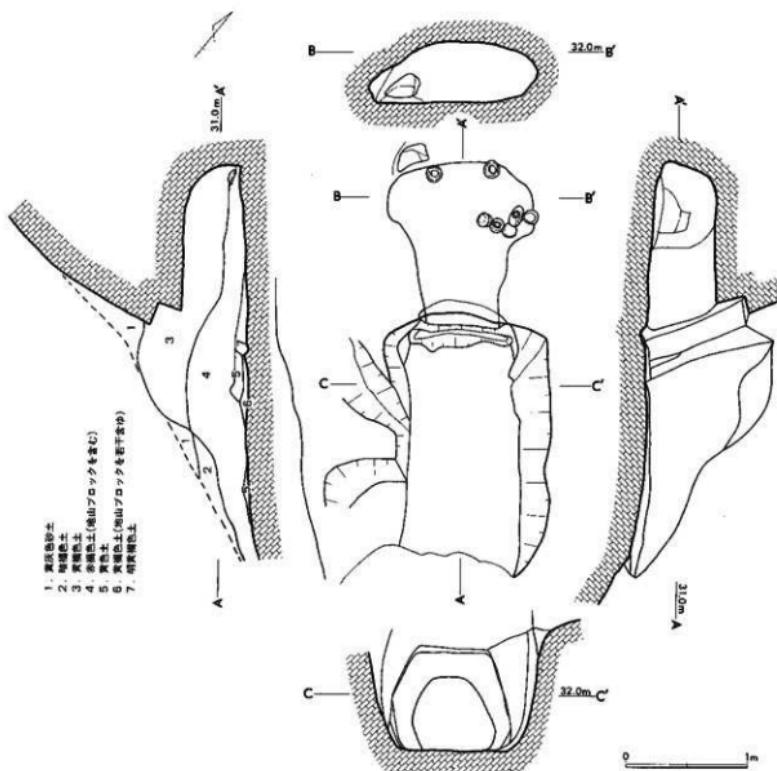
この横穴墓は、この斜面に方眼を設定して遺構の検出作業を行ったときに落ち込みと、須恵器の甕片を検出したことによって確認した。調査は、この落ち込みを谷と平行するように半載して実施した。調査の結果、この落ち込みは、横穴墓の墓道部であることが判明した。

墓道は、先端が流失しており、不明であるが、その床面がほぼ長方形をなしている。方位は、N-140°-Eである。現状では、長さ2.3m、幅0.85~1.0mを測る。墓道は、深いところでは1.05m地山を掘り込んで造成している。床面は、前方に向かってやや傾斜する。羨門は、墓道側から見て両側が

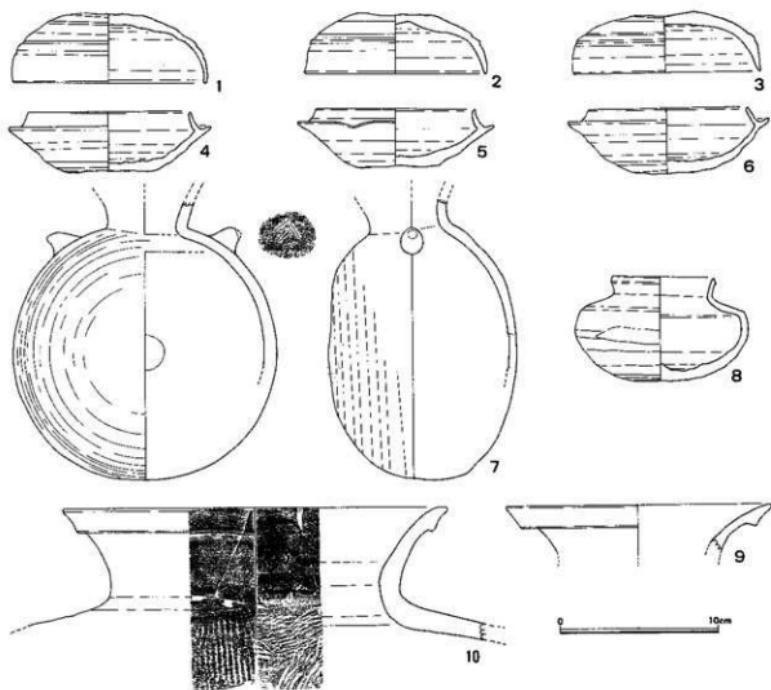
丸みを帯びた台形を呈している。床面で幅0.9m、高さ0.85m、奥行き0.4mを測る。床面には、幅2.0cm、深さ7cmの墓道と直交する溝が掘られている。羨道は、平面形が逆「ハ」の字形になっている。墓道側から見ると、羨門とよく似た形状を取るが、より丸みを帯びる。床面の幅0.6~0.85m、高さ0.55mをはかる。玄室は、平面形が不定形であるが奥行き0.55m、幅1.2mを測る。天井は、一応ドーム形をなしておらず、高さ0.5mを測る。羨道と玄室の天井の境は、明瞭ではない。左奥壁には、幅30cm、奥行き20cmの槽状の小穴が存在する。

調査時点で羨道から玄室にかけては、土砂が充填された状態にあった。閉塞装置は、確認できなかった。土層は、5~7層にかけては、埋葬時かそれに近い時期の所産と考えられるが、1~4層については、はっきりしない。ただ、1~3号横穴墓の前部の状況を参考にすれば、いずれもある時期に前部において埋土がなされており、3、4層に乱れがないことを考慮すれば、この横穴墓もある時期に埋められた可能性も考えられる。

遺物は、墓道1、2層から須恵器壺、壺片が玄室4層及び4層直上から須恵器蓋杯、提瓶、小型短頸壺



第114図 III区 4号横穴墓実測図



第115図 Ⅲ区 4号横穴墓出土須恵器実測図(1~8 玄室出土、9・10 羨道出土)

が出土した。また、玄室排土中から不明鉄製品が出土している。

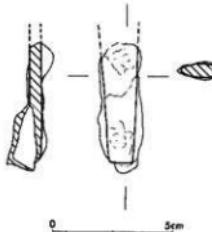
出土遺物（第115図、第116図）

須恵器（第115図）

第115図1~6は、蓋杯である。この内1~3は、蓋でいずれも肩部には2状の沈線を施し口縁端部は丸く収めている。調整は、天井部外面に回転ヘラ削り、天井部外面から内面にかけて回転ナデを行っている。また、天井部内面には、仕上げナデを施している。1は、口径12.0cm、器高4.3cmを測り、淡灰色を呈す。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は、良好である。2は、口径11.6cm、器高3.8cmを測り、暗灰色を呈す。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は、良好である。3は、口径12.0cm、器高3.7cmを測り、黒褐色を呈す。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は、良好である。4~6は、杯身で口縁が短く内径して立ち上がっている。調整は、底部外面に回転ヘラ削り、体部外面から内面にかけて回転ナデを行っている。また、見込みには仕上げナデを施している。4は、口径10.2cm、最大径12.4cm、器高3.7cmをはかり、緑黄色を呈す。自然釉がかかる。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は、良好である。5は、口径9.9cm、最大径13.4cm、器高3.7cmをはかり、淡灰色を呈す。自然釉がかかる。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は、良好である。焼け歪みが認められる。6は、口径9.9cm、最大径12.6cm、器高4.1cmをはかり、淡灰色を呈す。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は、良好である。

大谷編年の出雲3・4期に該当すると考えられる。

第115図7は、提瓶である。口縁部を欠損する。胸部正面は、円形をなし胸部側面形は、ほぼ、対称形である。肩部にある把手は、退化して突起状になっている。頸部外面には、ヘラ記号が認められる。頸部径5.0cm、胸部正面径16.5cm、胸部側面径11.8cm、残存高17.4cmを測る。胸部正面には、回転ヘラ削りが認められる。色調は、灰白色である。胎土には、若干の砂粒を含むも焼成は良好である。大谷編年の出雲3・4期に該当すると考えられる。



第115図 Ⅱ区4号
横穴墓出土鉄製品実測図

第115図8は、小型短頸壺である。口縁端部外面には面が出来る。肩は張っている。口径5.6cm、頸部径5.2cm、胸部最大径10.8cm、器高6.5cmを測る。調整は、内面から肩部外面にかけて回転ナデ、以下外面は、回転ナデを施している。灰黄色で胎土は緻密である。精巧な作りである。

第115図9、10は、壺と甕の破片である。墓道から出土した。9は、復元口径16.5cm、残存高3.1cmを測る壺の口縁部である。調整は、内外面とも回転ナデである。灰白色で胎土には、若干の砂粒を含む。10は、復元口径23.9cm、残存高8.2cmを測る甕の口縁部である。自然釉がかかる。調整は、口縁部内外面とも回転ナデ、肩部は、内外面ともタタキ目を施している。灰黄色で胎土は、緻密である。

第116図は、幅1.0～1.6cm、残存長4.9cm、厚さ0.5cmを測る用途不明の鉄片である。刀子の茎の可能性もある。

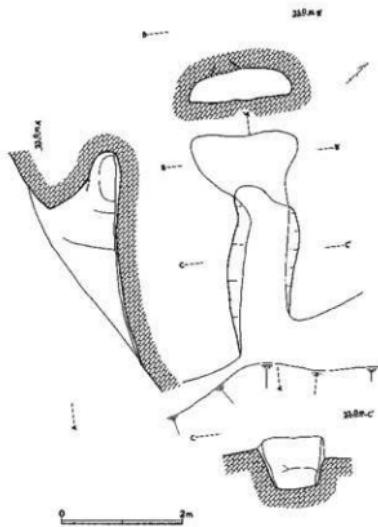
5号横穴墓（第117図）

4号横穴墓の位置する谷の斜面には、合計3基の小型の横穴墓が並んで存在するが、5号横穴墓は、その東端に所在する。横穴墓の開口する高さは、4号横穴墓とはほぼ同じである。

5号横穴墓は、長さ0.6m、幅0.27m、深さ0.32mの墓道と幅0.85m、奥行き0.8mの極めて小規模で不整形な玄室を有する小横穴である。閉塞装置、遺物とも存在しなかった。

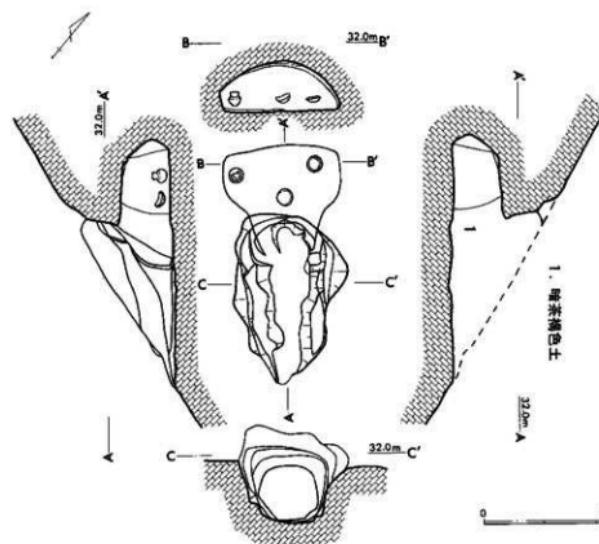
6号横穴墓（第118図）

4号横穴墓と5号横穴墓との中間に位置する小型の横穴墓である。長さ1.1m、幅0.35m、深さ0.5mの墓道と幅0.95m、奥行き0.9mの極めて小規模玄室を有する小横穴である。小規模ながら玄室は端正に造られており、一応羨道と玄室を意識している様に思える。天井形態はドーム形である。墓道及び玄室には暗茶褐色土が充填していた。閉塞装置は、存在しなかったが玄室から須恵器蓋杯と直口壺が出土した。



第117図 Ⅲ区5号横穴墓実測図

出土遺物（第119図）

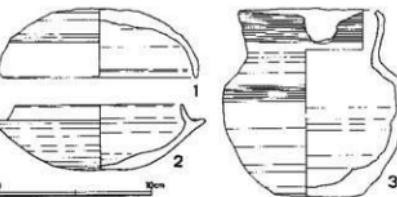


第118図 II区6号横穴墓実測図

1は、蓋杯
蓋である。肩
部には、強い
ナデによって
表現された稜
が存在する。
また、口縁部
内面には、沈
線により、段
を表現してい
る。口径12.2
cm、器高4.4
cmを測る。調
整は、天井部
外面に回転ヘ
ラ削り、その
他は、内外面
とも回転ナデ

を施している。淡青灰色を呈す。胎土、
焼成とも良好である。2は、杯身である。
口縁が短く内径して立ち上がっている。
底部外面にはヘラ切り痕が残る。調整は、
底部外面に回転ヘラ削り、体部外面から
内面にかけて回転ナデを行っている。口
径10.8cm、最大径13.8cm、器高4.2cmを測
る。淡灰色を呈す。胎土、焼成とも良好
である。

3は、口径8.9cm、胸部最大径11.6cm、
器高12.1cmを測る直口壺である。口縁部と肩部にカキメを施している。また、胴部過半から底部にか
けての外面に回転ヘラ削りを施している。その他は、回転ナデを行っている。淡灰色を呈す。胎土には若干の砂粒を含むも焼成は良好である。



第119図 III区6号横穴墓玄室出土須恵器実測図

第119図1~3は、いずれも大谷編年の出雲3~4期に該当すると考えられる。
遺構に伴わない遺物

第1調査区東斜面（第120図～第121図）

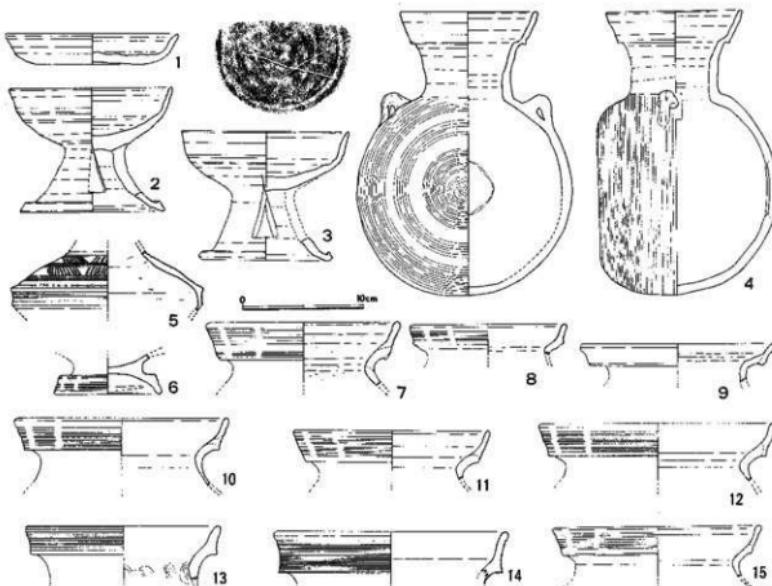
第120図は、第1調査区の内、尾根の東側の上部で出土した土器を取り上げた。

1~4は、須恵器である。1は、復元口径14.1cm、器高2.6cm、底径8.5cmを測る杯である。底部外面は、

静止糸切りを行っている。その他は、回転ナデを施している。2~4は、纏まって出土している。このうち、2、3は、無蓋1段透かし高杯である。いずれも、杯部外面の中程に2条の凹線が認められる。脚端部の折り返しはシャープである。透かしは2方向に穿たれており、その形状は、三角形である。調整は、回転ナデで見込みには仕上げナデが施されている。2は、口径13.2cm、脚端部径11.6cm、器高10.2cmを測る。脚部の1/3を欠損する。杯部見込みに「キ」形の線刻が認められる。3は、口径13.6cm、脚端部径10.3cm、器高10.6cmを測る。脚部の1/2を欠損する。杯部見込みに「×」のヘラ記号が認められる。脚部内面奥には、赤色顔料が付着している。4は、口径11.1cm、器高23.4cm、胸部最大径17.7cm、胸部最大幅14.7cmを測る提瓶である。口縁は、複合口縁で肩部には環状の把手を取り付けている。調整は、口縁部から頸部にかけて内外面とも回転ナデを行っている。胴部外面は、ヘラ削りの後カキ目による調整を行っている。

2~3は、大谷編年の3・4期に該当する。前記した2~6号横穴墓に関係する遺物と考えられる。

5~15は、弥生土器である。5は、復元胸部最大径15.9cmを測る壺の破片である。口縁部は、欠損する。胸部は、算盤玉状を呈するものと考えられる。胸部最大径にあたる部分は、タガ状をなしている。胸部外面は、沈線で区画された3段の文様帯があり、上野2段には2枚貝の腹縁による連続刺突文が羽状に施され最下段には直徑3mmの竹管文が連続して刺突されている。また、タガ状部分には4本の沈線が施文されている。これらの文様の施文は、横ナデの後ほど越されている。内の調整は、横方向のヘラ削りである。色調は、赤みのかかった黄褐色を呈している。6は、復元脚端部径8.4cm、

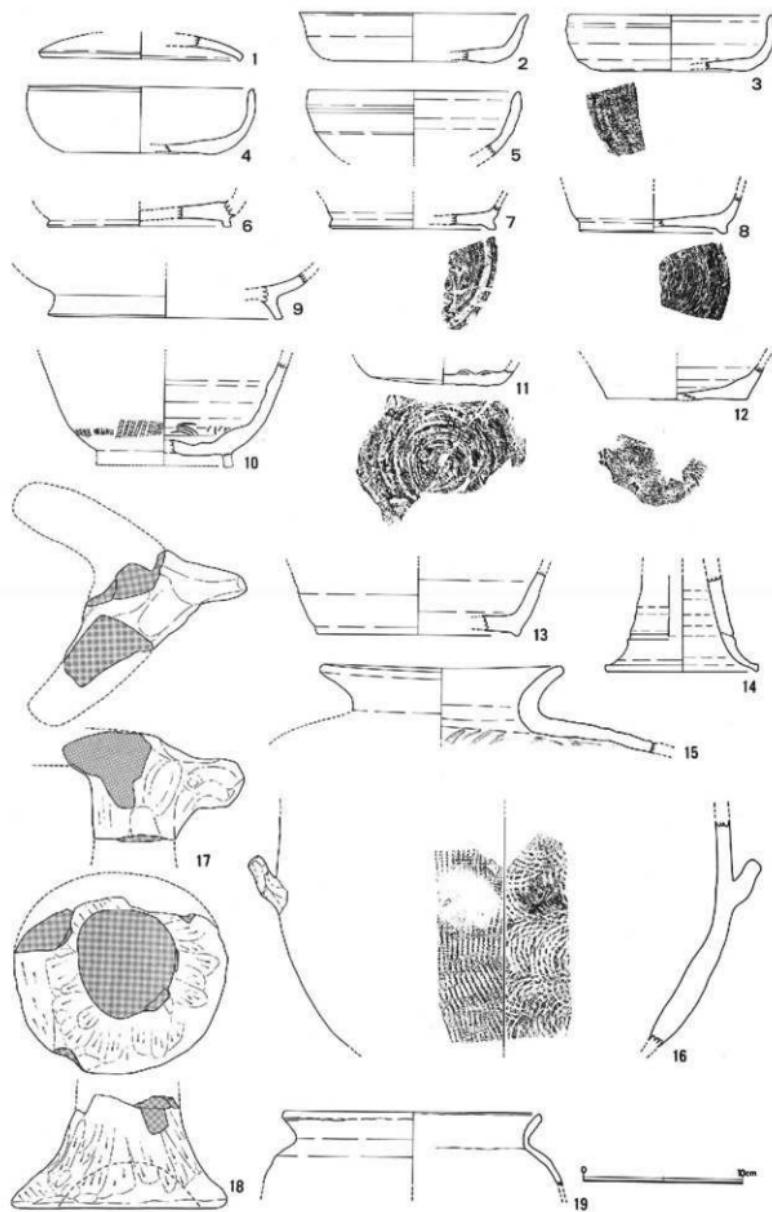


第120図 Ⅱ区第1調査区東斜面上部出土遺物実測図(1~4 須恵器、5~15 弥生土器)

残存高3.3cmの台付き壺の破片である。5の下部に当たるものであろうか。端部は、複合口縁状をなし5条の擬凹線を配している。調整は、内外面とも横ナデである。7~15は、壺、甕類の口縁部である。いずれも複合口縁を有している。9を除いて口縁部には擬凹線を配している。7は、復元口径15.2cm、残存高5.2cmを測る。口縁部には9条の擬凹線を配しているが横ナデによりうすくなっている。調整は、口縁端部から頸部の外面にかけて横ナデ、口縁部内面から頸部内面にかけて横方向のヘラ磨き、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。8は、復元口径12.5cm、残存高2.6cmを測る。口縁部には、4条の擬凹線を配している。調整は、内外面とも横ナデを施している。外面には、煤が付着している。9は、復元口径15.6cm、残存高3.3cmを測る。調整は、口縁端部から頸部の外面にかけて横ナデ、口縁部内面から頸部内面にかけて横方向のヘラ磨き、頸部以下内面に横ナデを施している。10は、復元口径17.3cm、残存高5.5cmを測る。口縁部には、6条の擬凹線を配している。調整は、口縁端部から頸部の外面にかけて横ナデを施しているが口縁部内面から頸部内面にかけては器面の剥落のため不明である。11は、復元口径16.0cm、残存高4.0cmを測る。口縁部には、6条の擬凹線を配している。調整は、器面の剥落のため不明である。外面には、煤の付着した痕跡が認められる。12は、復元口径19.1cm、残存高4.7cmを測る。口縁部には、7条の擬凹線を配している。調整は、口縁端部から頸部の外面にかけて横ナデを施しているが口縁部内面から頸部内面にかけては器面の剥落のため不明である。13は、復元口径16.0cm、残存高4.4cmを測る。口縁部には、7条の擬凹線を配している。調整は、口縁端部から頸部の内面にかけて横ナデを施しており、頸部内面に指頭による圧痕を施している。14は、復元口径19.5cm、残存高4.3cmを測る。口縁部には、12条の浅くて細い擬凹線を配している。調整は、口縁端部から頸部の外面にかけて横ナデを施している。15は、復元口径16.8cm、残存高4.3cmを測る。口縁部には、8条の擬凹線を配している。調整は、口縁端部から頸部の外面にかけて横ナデを施しているが口縁部内面から頸部内面にかけては器面の剥落のため不明である。外面には、煤が付着している。

第121図、122図は、東斜面下部から出土した土器を取り上げた。

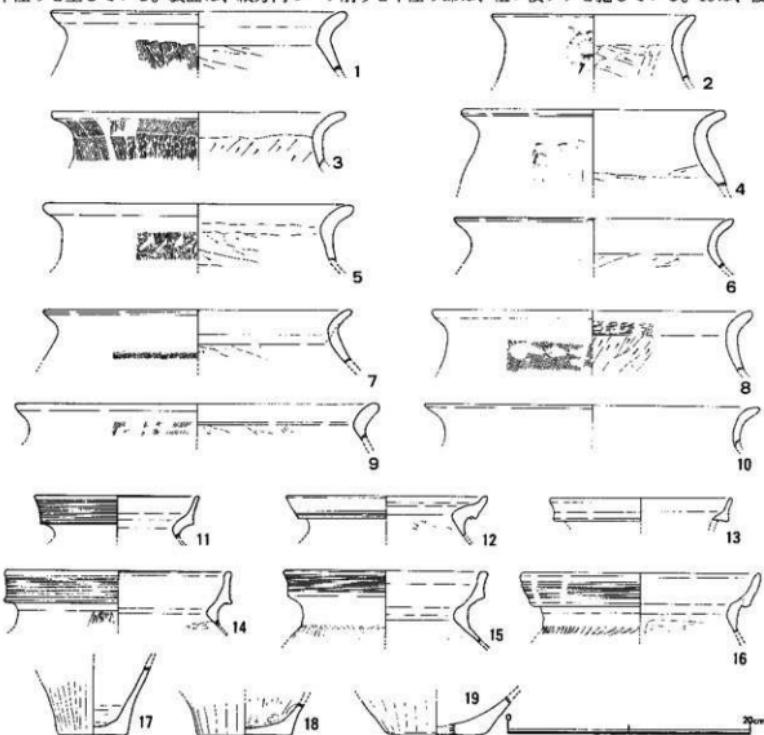
第121図1~16は、須恵器である。1は、復元口径12.3cm、器高1.5cmを測る杯蓋である。口縁端部は、垂直に短く折れ曲がっている。調整は、内外面とも回転ナデである。2~5、11は、杯身である。2は、復元口径14.2cm、残存高3.0cmを測る。調整は、底部外面を除いて内外面とも回転ナデである。底部の外面の調整は不明である。3は、復元口径12.7cm、器高3.5cmを測る。底部の切り放しは回転糸切りで行っている。その他の調整は、回転ナデである。4は、復元口径14.0cm、器高4.1cmを測る。調整は、底部外面を除いて内外面とも回転ナデである。底部の外面の調整は不明である。5は、復元口径13.1cm、残存高4.0cmを測る。調整は、内外面とも回転ナデである。11は、底径8.1cm、残存高1.1cmを測る。底部の切り放しは回転糸切りで行っている。その他の調整は、回転ナデである。6~9は、高台杯である。6は、復元高台径11.5cm、残存高1.6cmを測る。底部の切り放しは、ヘラ起こしで行っている。調整は、底部外面以外回転ナデを行っているが見込みには仕上げナデが認められる。7は、復元高台径10.4cm、1.6cmを測る。底部の切り放しは、ヘラ起こしで行っている。調整は、底部外面以外回転ナデを行っている。8は、復元高台径9.8cm、残存高2.5cmを測る。底部の切り放しは、回転糸切りで行っている。調整は、底部外面以外回転ナデを行っているが見込みには仕上げナデが認められる。9は、復元高台径14.5cm、残存高30cmを測る。高台は高く、逆「ハ」の字形に強く踏ん張る。調整は、



第121図 Ⅲ区第1調査区東斜面下部出土遺物実測図(1)(1~16 須恵器、17~19 土師器)

底部外面以外回転ナデを行っている。10、12、13は、壺の破片である。10は、復元底径8.4cmの高台杯の壺である。胴部上半以上と高台を欠く。胴部下半外面の一部と底部内面にはタタキ目が認められる。その他の調整は、回転ナデである。12は、復元底径8.7cm、残存高2.3cmを測る。底部の切り放しは、回転糸切りで行っている。調整は、内外面とも回転ナデである。13は、復元口径125cm、残存高40cmを測る。低く小さい高台が付く。調整は、内外面とも回転ナデと考えられる。14は、復元端部径9.4cm、残存高6.0cmを測る高壺の脚部である。上半部を欠く。2条の凹線を施しており、2方向に長方形の透かしを有している。調整は、回転ナデである。15は、口径15.2cm、残存高5.4cmを測る土器である。横瓶の可能性がある。調整は、口縁部から頸部にかけての外面に回転ナデ、胴部内外面にタタキ目を施す。16は、復元胴部最大径27.9cmを測る把手付きの土器である。壺の可能性もあるが上下を欠いており明らかでない。把手は、棒状をなしている。調整は、内外面ともタタキ目を施し、外面の一部にはカキ目を配している。

第121図17～19は、土師器である。このうち、17、18は、獣手形土製支脚である。17は、胴径5.2cm、残存高6.7cmを測る。頭部の破片である。内部には、粘土が充填しており、表面は、押さえナデを行っている。18は、基部の破片である。底径13.9cm、残存高6.9cmを測る。粘土が充填しているが底部は、中窪みを呈している。表面は、綫方向のヘラ削りを中窪み部は、粗い横ナデを施している。19は、復



第122図 Ⅲ区第1調査区東斜面下部出土遺物実測図(2)(1～10 土器、11～19 弥生土器)

元口径15.8cm、残存高4.5cmを測る「く」の字の壺片である。頸部内面から胴部外面にかけて横ナデを施している。

第122図1～10は、土師器の壺である。いずれも、「く」の字口縁を有する土器である。1は、口径24.4cm、残存高4.9cmを測る。調整は、口縁部内外面に横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。2は、復元口径16.7cm、残存高5.3cmを測る。調整は、口縁部内外面に横ナデ、頸部以下内面にヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。3は、復元口径24.1cm、残存高4.5cmを測る。調整は、口縁端部から口縁部内面にかけて横ナデ、頸部以下内面に斜め方向のヘラ削り、口縁端部以下外面に縦方向の刷毛目を施している。4は、復元口径21.8cm、残存高6.0cmを測る。調整は、口縁部内外面及び頸部内面に横ナデ、胸部内面に横方向のヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。5は、復元口径25.5cm、残存高4.5cmを測る。調整は、口縁部内外面に横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。6は、復元口径26.9cm、残存高3.8cmを測る。調整は、口縁部内外面に横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。7は、口径25.3cm、残存高4.0cmを測る。調整は、口縁部外面に横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。口縁部内の調整は、不明である。8は、復元口径26.3cm、残存高4.9cmを測る。調整は、口縁部外面に横ナデ、口縁部内面に横刷毛の後横ナデ、頸部以下内面に斜め方向のヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。9は、復元口径29.9cm、残存高2.5cmを測る。調整は、口縁部内外面に横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。10は、復元口径27.5cm、残存高2.8cmを測る。調整は、口縁部外面に横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削り、頸部以下外面に刷毛目を施している。

第122図11～16は、弥生土器の壺、壺類の口縁部である。いずれも複合口縁を有している。13を除いて口縁部には擬凹線を配している。11は、復元口径13.5cm、残存高3.6cmを測る。口縁部には7条の擬凹線を配している。調整は、口縁端部から頸部の外面にかけて横ナデ、口縁部内面から頸部内面にかけて横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。12は、復元口径16.6cm、残存高3.3cmを測る。口縁部下端には2条の擬凹線を配している。調整は、口縁部内外面と頸部の外面に横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。外面には、炭化物が付着している。14は、復元口径18.6cm、残存高4.5cmを測る。口縁部には7条の幅の狭い擬凹線を配している。調整は、口縁部内面と頸部の内面に横ナデ、頸部外面にヘラ磨き、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。外面には、炭化物が付着している。15は、復元口径16.8cm、残存高5.7cmを測る。口縁部には7条の幅の狭い擬凹線を配している。調整は、口縁部内外面と頸部の外面に横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。頸部外面には、櫛状工具による連続刺突文が施文されている。16は、復元口径19.4cm、残存高4.8cmを測る。口縁部には6条の擬凹線を配している。調整は、口縁部外面と頸部の内面に横ナデ、口縁部内面にヘラ磨き、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。

第122図17～19は、弥生土器の壺、壺類の底部である。いずれもしっかりとした平底を呈している。17は、底径5.6cm、残存高5.7cmを測る。調整は、外面が縦方向のヘラ磨き、内面がヘラ削りを施している。18は、底径7.6cm、残存高2.5cmを測る。調整は、外面が縦方向のヘラ削り、内面が指頭による押圧とヘラ削りを施している。19は、底径5.2cm、残存高3.2cmを測る。調整は、外面が縦方向のヘラ削り、を施している。内面の調整は、不明である。

第1調査区南斜面（第123図）

弥生土器（1～10）

1～5、7は、弥生土器の壺、甕類の口縁部である。いずれも複合口縁を有している。2、4、5を除いて口縁部には擬凹線を配している。1は、復元口径15.0cm、残存高5.6cmを測る。口縁部には9条の浅くて狭い擬凹線を配している。また、頸部にも6条の浅くて狭い擬凹線を配している。調整は、口縁端部から頸部の内面にかけて横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。2は、復元口径16.5cm、残存高5.1cmを測る。頸部外面には、櫛状工具による連續施突文が配されている。調整は、頸部内面から頸部の外側にかけて横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。3は、復元口径14.8cm、残存高4.6cmを測る。口縁部には5条の擬凹線を配している。調整は、不明である。4は、復元口径17.9cm、残存高5.3cmを測る。調整は、頸部以下内面のヘラ削り以外不明である。5は、復元口径18.2cm、残存高4.9cmを測る。調整は、頸部内面から頸部の外側にかけて横ナデ、頸部以下内面に横方向のヘラ削りが施されている。7は、復元口径20.8cm、残存高6.3cmを測る。口縁部には6条の擬凹線を配している。また、頸部にも14条の浅くて狭い擬凹線を配している。調整は、口縁端部外面に横ナデ、口縁部以下内面に横方向のヘラ磨きが施されている。

6は、復元口径16.4cm、残存高5.0cmを測る鼓形器台の口縁部である。口縁部には5条の擬凹線を配しているが横ナデによって所々消えている。調整は、口縁端部外面から頸部内面にかけて横ナデ、頸部外面に縱方向のヘラ磨きが施されている。

8は、口径6.3cm、残存高4.0cmの手すくね土器である。下半部を欠いている。調整は、全面指頭による押圧を行っている。

9は、復元底径5.2cm、残存高3.1cmの底部の破片である。はっきりとした平底を呈す。調整は、内面がへら削りを行っているがその他は不明である。

10は、高環の受け部と脚部の接合部辺りの破片である。調整は、内外面とも不明である。

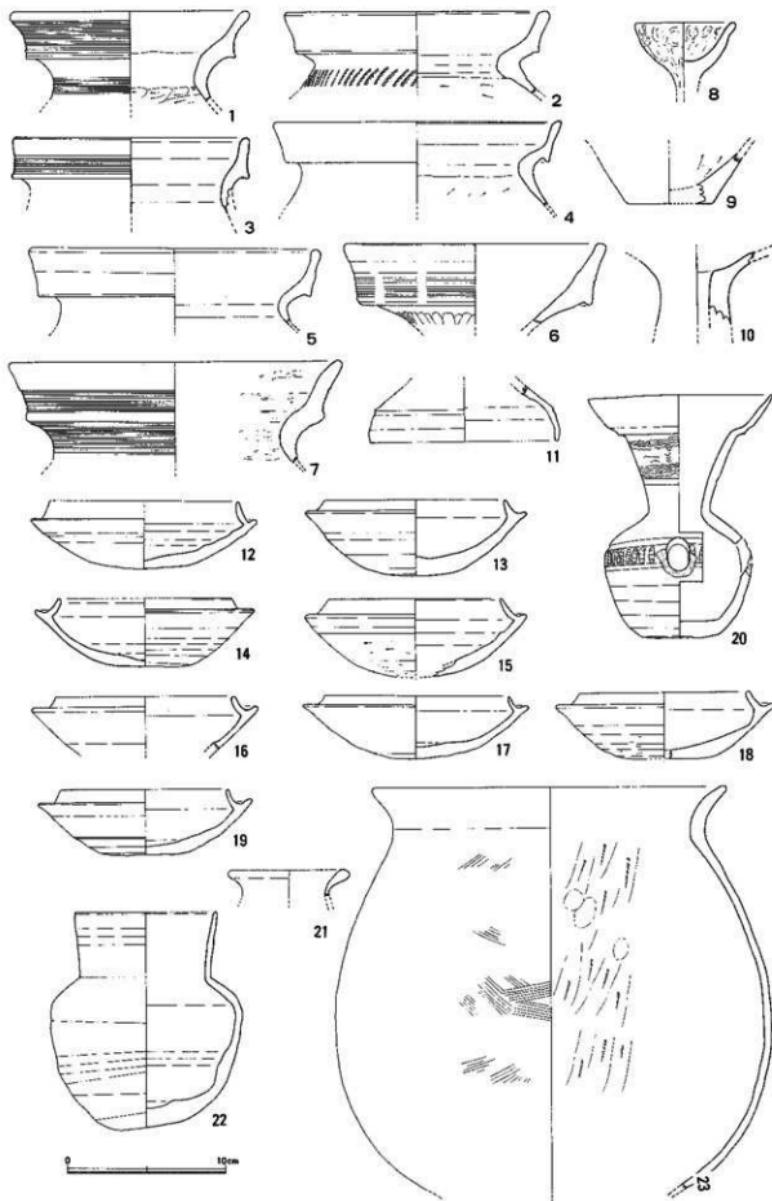
須恵器（11～22）

11～19は、蓋杯である。この内11は、蓋で口縁端部は丸く収めている。調整は、天井部外面から内面にかけて回転ナデを行っている。口径11.3cm、残存高3.3cmを測る。12～19は、杯身で口縁が短く内径して立ち上がっている。調整は、底部外面に回転ヘラ削り、体部外面から内面にかけて回転ナデを行っている。12は、復元口径11.6cm、復元最大径14.1cm、器高4.2cmを測る。底部は、回転ヘラ削り後、ナデを施している。13は、口径11.1cm、最大径13.7cm、器高4.7cmを測る。底部は、回転ヘラ削り後、ナデを施している。14は、口径10.7cm、最大径13.6cm、器高4.2cmを測る。16は、復元口径11.0cm、復元最大径14.1cm、残存高3.3cmを測る。17は、口径11.4cm、最大径14.0cm、器高3.9cmを測る。底部は、回転ヘラ削り後、ナデを施している。19は、口径10.3cm、最大径13.3cm、器高4.1cmを測る。

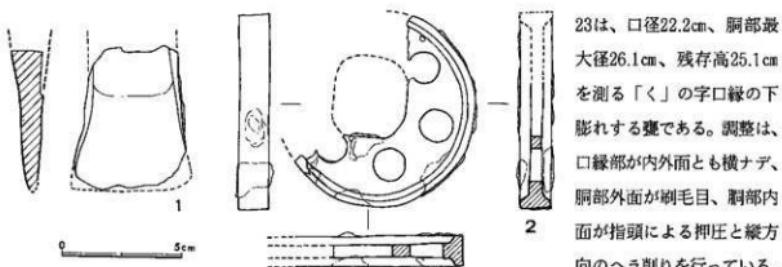
20は、復元口径11.5cm、くびれ部径3.9cm、底径4.8cm、器高15cmを測る甕である。筒部の上半には、退化した櫛描き波状文が、また、肩部には、櫛状工具による施突文が施されている。胴部下半部から底部にかけての外面に回転ヘラ削りを、その他には、回転ナデを施している。

22は、口径9.7cm、器高13.5cm、胴部最大径11.9cmを測る短径甕である。調整は、胴部下半部から底部にかけての外面に回転ヘラ削りを、その他には、回転ナデを施している。

土師器(23)



第123図 Ⅲ区第1調査区南斜面出土遺物実測図(1~10 弥生土器、11~22 須恵器)

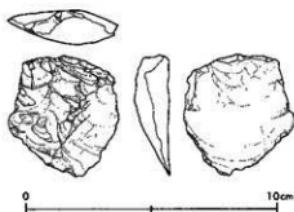


第124図 Ⅲ区第1調査区北斜面出土遺物実測図

23は、口径22.2cm、胸部最大径26.1cm、残存高25.1cmを測る「く」の字口縁の下膨れする甌である。調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、胸部外面が刷毛目、胸部内面が指頭による押圧と縦方向のヘラ削りを行っている。

第1調査区北斜面（第124図）

1は、鉄斧である。袋部を欠く。残存長5.8cm、刃部の残存幅4.0cmを測る。全体に鏽化が進行している。



第125図 Ⅲ区第2調査区出土玉髓製剝片

2は、鍔である。復元長径8.1cmを測る。径1.8cmの円形の孔が4カ所認められる。本来は、合計6カ所あったものと考えられる。

第2調査区（第125図、第126図）

第125図は、玉髓製の剥片である。上部に、打撲面が存在する。打角は、110°位であったものと考えられる。背面には、基本的に同方向の剥離痕がみられる。旧石器時代の所産と考えられる。

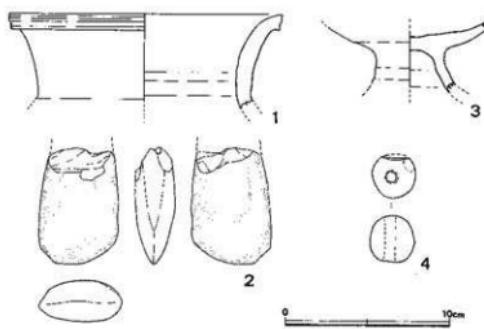
第126図1、3は、須恵器である。1は、復元口径16.5cm、復元頸部径12.9cm、5.5cmを測る甌の口縁部である。口縁端部外面には、面が付く。調整は、内外面とも回転ナデである。口縁端部の面には、2条の凹線が認められる。3は、脚部最小径4.2cmを測る高坏である。脚部には、円形透かしが認められる。調整は、回転ナデであるが杯部見込みには仕上げナデが施されている。また、この見込みには重ね焼きの痕跡が認められる。

第126図2は、磨製石斧である。基部を欠く。刃部の幅4.6cm、残存長7.0cmを測る。

第126図4は、土師質の土玉である。幅2.6cm、高さ2.7cmを測る。中央には、径0.6cmの孔が穿たれている。器表面には指頭による押圧が認められる。

第3調査区（第127図、第128図）

第127図は、第3調査区の西斜面から出土した鉄斧である。袋部の一部を欠く。刃部は、ばち形を呈している。袋部は、両側から折り曲げて柄の部分を押さえている。刃部幅4.6cm、残存長

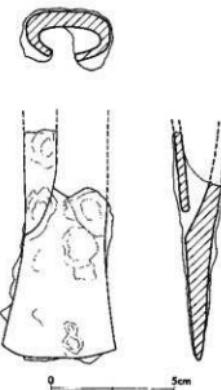


第126図 Ⅲ区第2調査区出土遺物実測図

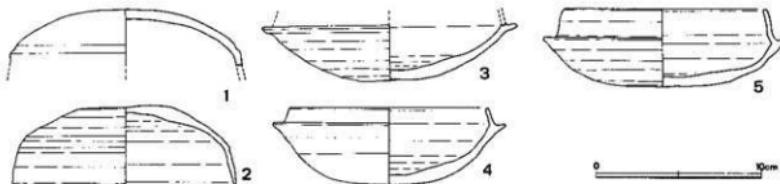
6.2cm、袋部幅3.3cm、袋部最小厚2.0cmを測る。

第128図は、第3調査区東斜面土器だまりから出土した須恵器蓋杯である。1、2は、蓋である。1は、口縁部を欠く。残存高3.5cm、径13.9cmを測る。縁の上には、1条の沈線が認められる。調整は、天井部外面に回転ヘラ削りが、その他には回転ナデが認められる。2は、口径13.5cm、器高3.3cmを測る。口縁端部には、かすかに段を有している。また、縁の上部には、不明瞭な沈線が認められる。調整は、天井部外面に回転ヘラ削りが、その他には、回転ナデを行っている。

なお、天井部外面中央は、削り残している。3～5は、杯身である。3は、口縁部を欠く。復元最大径15.4cm、残存高3.4cmを測る。調整は、底部外面を除いて内外面とも回転ナデである。底部の外面の調整は回転ヘラ削りである。4は、口径11.8



第127図
Ⅲ区第3調査区西斜面出土鉄斧実測図



第128図 Ⅲ区第3調査区東斜面出土須恵器遺物実測図

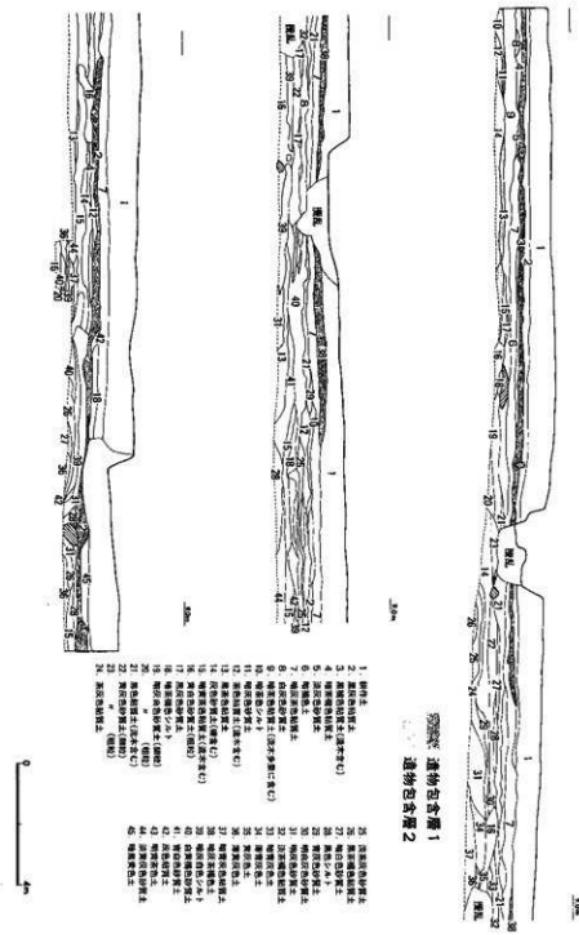
cm、最大径14.6cm、器高3.0cmを測る。調整は、底部外面を除いて内外面とも回転ナデである。底部の外面の調整は不明である。5は、口径12.0cm、最大径14.8cm器高4.7cmを測る。口径が大きく口縁部も立ち上がっている。調整は、底部外面を除いて内外面とも回転ナデである。底部の外面の調整は回転ヘラ削りである。古相を示しており、大谷編年の出雲2期に該当する。須恵邑編年T K10に平行するものであろうか。

4 IV区の調査

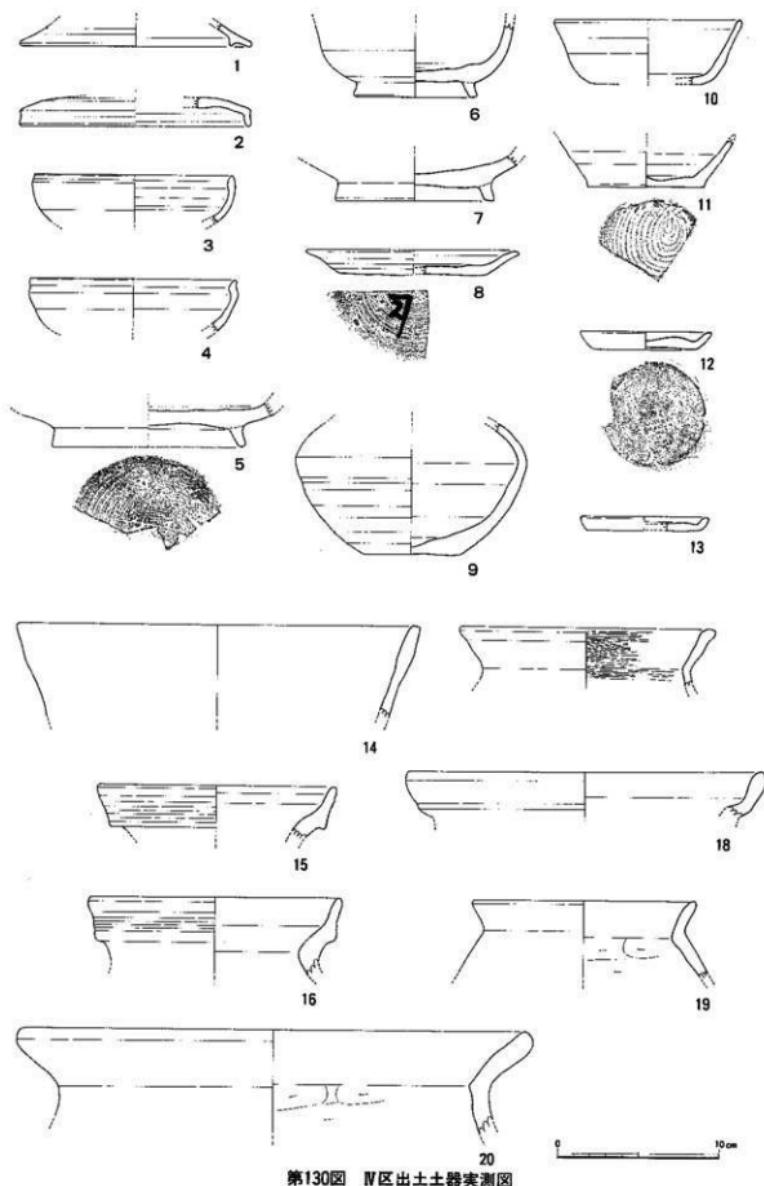
IV区はII区とIII区の丘陵に挟まれた谷間に位置する水田部で、地表面の標高は約7mを測る。深さは北端で約2m、南端で約3mを測り、遺構は確認できなかったものの、黒褐色粘質土層（遺物包含層1）と黒茶色粘質土（遺物包含層2）の2層の遺物包含層を確認した。

遺物包含層1

包含層1は、水田面から約1mの深さで検出したもので、厚さ25~30cmを側り、ほぼ調査区全面に広がっている。遺物は少量で、ほとんど磨滅した小片であったが、縄文土器から土師質土器までを含んでいた。



第129図 IV区土層断面図



第130図 IV区出土土器実測図

遺物包含層2

包含層2は深さ1.8mの地点で検出したもので、厚さ20~25cmを測り、調査区の北端部分のみに存在していた。遺物としては、木製品が2点出土しただけである。包含層1出土遺物（第130図）

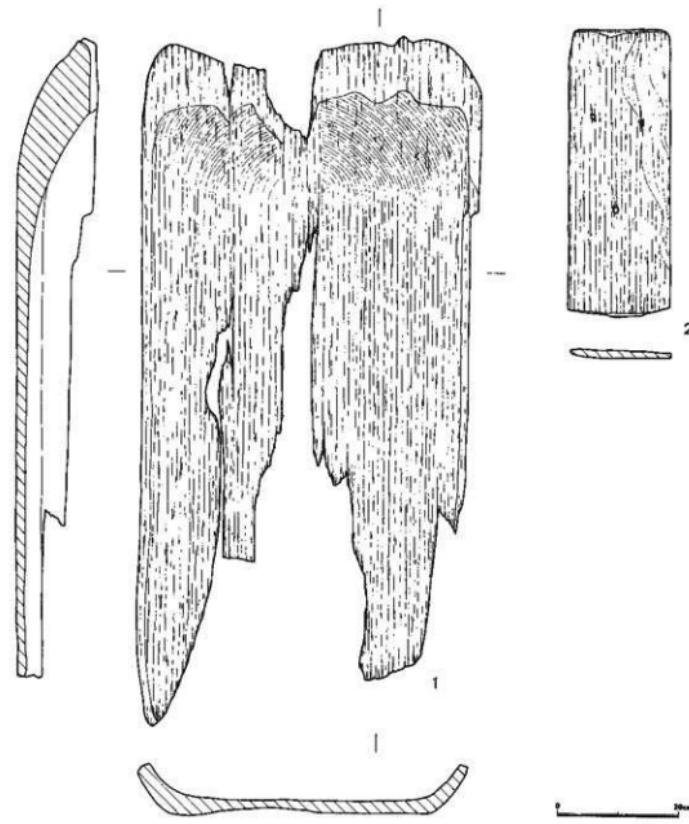
出土したもののはほとんどが磨滅した小片であり、図化できたものは20点であった。

1、2は須恵器の蓋で、1はかえりを有し、2は口縁部が屈曲するものである。1は口径14.6cm、かえり径12.0cm、残存高1.4cmを側り、焼成は良好で、内面、外面とも灰色である。2は口径14.4cm、残存高1.8cmを測り、天井部外面には回転ヘラ削りを施す。3~7は須恵器杯身で、3、4は口縁端部が屈曲するもの、5~7は高台を有するものである。3は口径12.6cm、残存高3.0cmを測り、内面、外面ともに回転ナデを施す。4は口径13.0cm、残存高3.2cmを測り、回転ナデを施す。5は高台径12.3cm、残存高2.8cmを測り、底部外面に回転糸切り痕が若干後っている。また、底部中央付近にヘラ記号が認められる。6は高台径7.8cm、残存高4.5cmを測り、杯部は口縁部を欠くものの椀形に近い。7は高台径10.0cm、残存高2.8cmを測り、底部外面に回転ヘラ削りを施す。8は須恵器の皿で、口径13.4cm、底径9.0cm、器高1.5cmを測り、口縁部は外反してのび、端部は丸い。底部外面に回転糸切り痕をもつ。また、底部外面には解読はできなかったが墨書が施されていた。9は須恵器壺の体部で、最大径14.4cm、残存高8.2cmを測り、胴部下半に回転ヘラ削りを施す。内、外面に自然釉が付着している。10、11は焼成不良の須恵器杯身である。10は口径11.6cm、器高4.0cmを測り、口縁部はやや外反してのびる。11は口縁部を欠くが、体部が外傾して直線的にのびるものである。底径7.2cm、残存高2.9cmを測り、底部外面に回転糸切り痕が残る。12、13は土師器の小皿である。12は口径8.2cm、器高1.1cmを測り、底部外面に回転糸切り痕が残る。内面には煤が若干付着している。13は口径8.0cm、器高0.9cmを測り、底部外面に糸切り痕が若干後っている。14は繩文土器の口縁部であり、内面に若干の条痕が認められるが、全体的に磨滅が著しい。口径は25.4cmを測る。15、16は弥生時代後期末の壺形土器で、複合口縁を呈するものである。15は口径15.0cm、残存高3.1cmを測り、口縁部はやや外傾してのび、端部は丸い。口縁部外面には7~8条の平行沈線を施している。16は口径16.0cm、残存高4.8cmを測り、口縁部は垂直気味にのびる。口縁部外面に平行沈線が若干残る。17~20は土師器の壺形土器である。17は口径16.0cm、残存高3.5cmを測る単純口縁のもので、口縁端部が若干肥厚する。内面はハケ目を施しているが、外面は煤が多量に付着しているため不明である。18は棟合口縁の退化したもので、口径22.2cm、残存高2.8cmを測る。内面には煤が付着している。19は口径14.0cm、後存高4.8cmを測り、口縁部は外反してのびる。頸部内面にはヘラ削りを施している。20は口径32.4cmを測る大型の壺で、口縁部は外反してのびる。頸部内面にヘラ削りを施し、外面には煤が付着している。包含層2出土遺物（第131図）

出土遺物は舟形木製品と田下駄の2点のみであった。1は舟形木製品で現存長112cm、量大幅54cm、高さ12cm、厚さは最大で8cmを測る。板材を割り抜いて作り出されたもので、形状は平面形で隅丸長方形、舟体の断面は半円形を呈す。2は田下駄で長さ45.4cm、幅16.3cm、厚さ6cmを測り、形状は長方形を呈する。表面に小孔が三ヵ所穿たれているが、全体的に粗雑な感じである。

小結

今回の門査では遺構は確認できなかったが、2層の遺物包含層を確認した。包含層1は繩文～中世の土器を含んでいたが、そのほとんどが磨滅した小片であったため、周辺から流れ込んだものと思われ



第131図 IV区出土木製品実測図

るまた、1点であったが墨書き器が出土しており注目される。包含層2からは舟形木製品と田下駄が出士していることから、水田跡が存在していることも考えられたが、今回の調査ではそれを確認することはできなかった。これら包含層の状況から、周辺には縄文や水田跡等の遺跡が存在している可能性も考えられるであろう。

第5章 自然科学的分析

岩屋口遺跡横穴より検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座 井上貴央

1 はじめに

本稿は安来市佐久保町岩屋口の横穴墓から検出された獣骨と人骨に関する報告である。骨の保存状況は良好とはいえないが、性別、年令の判明した人骨もある。骨は調査団の手によって横穴墓から検出され、図面が描かれた後、筆者が現地におもむき骨の取り上げをおこなった。今回は、岩屋口横穴および岩屋口南横穴から検出された骨について記載論考をおこないたい。なお、次節で記したNoは骨の取り上げ番号であり、図中に示した骨の番号と一致する。

2 検出入骨の記載

1) 岩屋口I区1号横穴

玄室からは人骨は検出されなかったが、玄門部から多量の貝殻と獣骨が検出された。今回検討を依頼された資料は獣骨であるが、貝殻は大部分がサルボウガイであったように記憶している。

獣骨は3点あり、1点はウシ左中足骨である。近位骨端は破損しているが、遠位骨端はよく保存されている。遠位骨端線は未閉鎖の状態にあり、このため遠位骨端は骨幹端から遊離している。検出時は遠位骨端は骨幹端と相接して検出されており、埋葬時は骨端軟骨が残存していたものと考えられる。ウシでは、中足骨の遠位骨端線が閉じるのは2~2.5才であるので、検出された中足骨は2才未満の幼獣であったものと思われる。他にウシと思われる大腿骨骨幹部が1点、左踵骨片が1点検出されている。

本遺跡概報によると、「玄門部には大量の赤貝の殻が堆積しており、この赤貝の殻の中から牛骨も2片出土しています。赤貝の殻は二枚合わさったものが多く、この中に認められた牛骨も軟骨が付着しているなど、食物の残滓が放置されたのではなく、埋葬時に供獻されたものだと考えられます」とある。「軟骨が付着している」は骨端線が未閉鎖で、埋葬時、骨端軟骨を伴っていたことを指すのであると思われるが、検出されたウシの骨は中足骨、踵骨、大腿骨の部分のみで、検出状況から推定すると、解体して食べたあととの残滓であるように思われる。

2) 岩屋口南Ⅲ区2号横穴

玄室の中央には横穴の長軸方向に溝状遺構が認められたが、人骨は脆弱なものが多くて骨の風化が進行しており、保存状況はきわめて悪かった。

遺体に関する横穴内の遺物としては、玄門から見て左後側と右前側に蓋杯が検出されている。これらの蓋杯の近辺からは頭蓋骨が検出されており、蓋杯は遺体を安置する際の枕として使用された可能性が強い。この蓋杯の近傍にあった頭蓋骨を1号頭蓋(No.3)、それよりやや中央寄りの頭蓋を2号頭蓋(No.2)、羨道から見て玄室の右側の頭蓋を3号(No.12)として以下に記載する。また、玄室奥には3個の角礫が検出されているが、この石は天井からの崩落に伴うものではなく、明らかに人為的なものであって、棺台として使用されたものかもしれない。

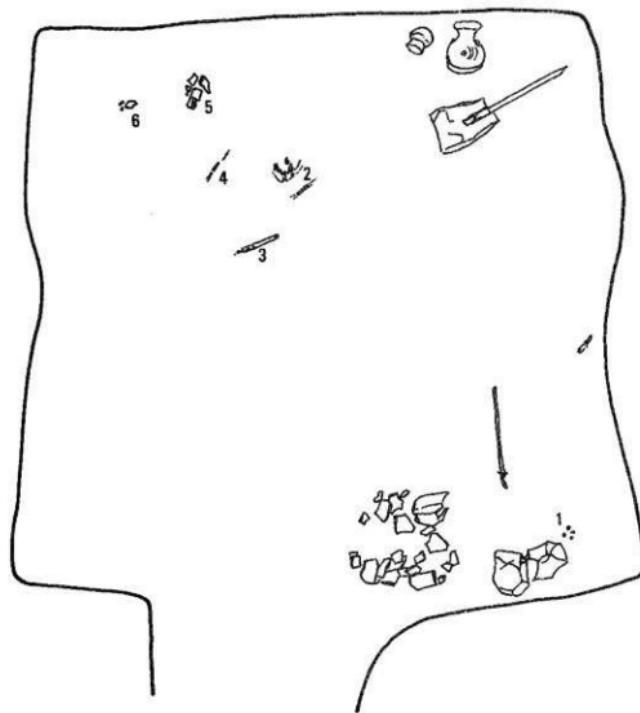


図1Ⅲ区2号横穴

玄室の左手前方には、4本の長管骨が玄室の長軸方向とほぼ平行に配列している(No.5、6、7、8)。これらの骨は風化が著しく骨片化しているが、骨厚からみて大腿骨と判断してよいと思われる。また、これらの骨のさらに玄門寄りには3本の脛骨らしい骨が検出されている(No.9、10、11)。No.11の脛骨は床面に堆積した埋土の上に載っており、永年の間に流水などの影響を受けて若干動いている。以上の骨の位置関係を考えると、羨道から見て玄室右側には1号頭蓋、2号頭蓋に関連する大腿骨、脛骨がほぼ原位置を保ったまま検出されているといってよい。つまり、1号頭蓋、2号頭蓋の被埋葬者が足先を羨道に向けて伸展位で埋葬されていた可能性が高い。

1号頭蓋(No.3)は破損が大きいが、右錐体、右頭頂骨、前頭骨の一部、右上顎第2小白歯～第2小白歯を伴った上顎骨、右第2、第3大臼歯を伴った下顎骨と18本の歯牙が検出されている。残存する頭蓋骨をみると、矢状縫合、冠状縫合は未閉鎖で、右下顎第3大臼歯が未萌出である。また、歯牙の咬耗度はMarrin 0～2である。これらの所見から判断して、1号頭蓋の年令は青

年～壮年前半であると考えられ、頭蓋骨の骨質が薄く眉弓の隆起も少ないとから被埋葬者は女性であった可能性が高い。

2号頭蓋(№2)は右錐体と臼歯が1本検出されているのみである。錐体は小さく、明らかに年少者のものであるが、年令を特定することはできない。また性別も不詳である。

3号頭蓋(№12)の部分からは、右錐体、頭蓋骨片、上下頸歯10本が検出されているのみである。歯牙の咬耗は進んでおらず、Martin 0～1度である。本頭蓋から性別を推定することはむずかしいが、歯牙の大きさから判断して男性である可能性が高い。年令は歯の咬耗度から壮年と推定される。第3頭蓋の近くから検出された№13、14の骨は長管骨であるが、風化が進み原形をとどめず、部位は不明である。

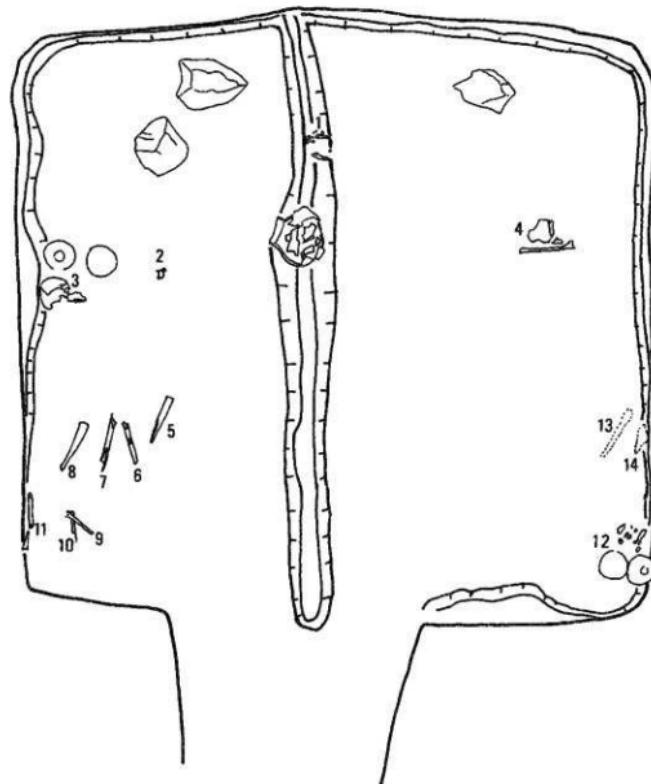


図2 III区 3号横穴

右奥側から検出されたNo.4の人骨のなかには、臼歯片、右寛骨、右踵骨片、左脛骨片が含まれている。このうち寛骨は坐骨切痕の角度が大きく、女性のものである。また、脛骨は近位骨端が未骨化の状態であり、弱年少者のものである。もしこれらの人骨が一体のものであるとすれば、10代後半の女性骨であると推定される。

玄室中央奥手には、大腿骨片（No.1）が検出されている。玄室奥から検出された3個の石が棺台であり、その上に伸展位で安置された被埋葬者の棺が置かれていたとすると、検出された大腿骨はちょうどいい位置から検出されたことになる。この大腿骨は骨片であって、性別、年令を特定できないが、成人骨であることは確かである。

3) 岩屋口南Ⅲ区3号横穴

枕あるいは棺台と考えられる石が、羨道から見て玄室の右側手前に2個検出されている。この付近には小白歯、大臼歯が4本検出されており（No.1）、鉄刀が玄室の長軸方向と一致して検出されていることから、1本は足先を玄室奥手に向けて伸展位で埋葬されていた可能性がある。この人骨に相当する四肢骨は検出されていない。検出された歯は歯冠部のみであるが、咬耗は進んでおらず（Martin 0～1度）、壮年の人骨であると思われる。性別は不明である。

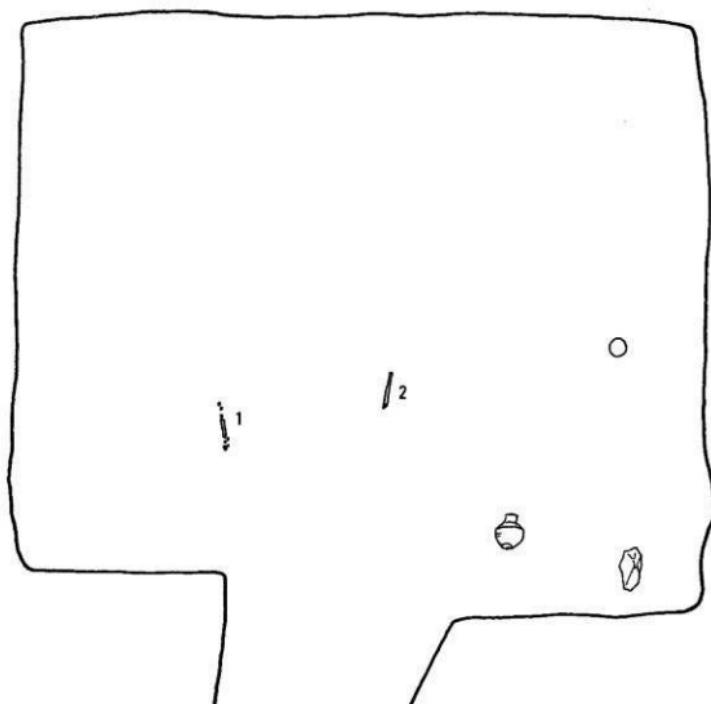


図3 Ⅲ区1号横穴

玄室の左奥手からは子供の頭蓋骨の一部（No.5、6）が検出されている。検出部位は、前頭骨の眉間から鼻骨にかけての部分と頭頂骨片である。これらの頭蓋骨は、大きさからみて子供のものであることは間違いない。この近辺の床土の中からは、後に第2乳臼歯と第1大臼歯が釘植した右上顎骨、子供のものと思われる右側頭骨が検出されている。この上顎骨は、歯の萌出状況から判断して6～11才の子供と推定され、No.5の子供の頭蓋と同一個体である可能性が高い。また、この床土の中には上述の子供の骨に混じって成人の歯牙が多数検出されており、成人の頭蓋も玄室左奥手にあったものと考えられる。これらの歯牙は総数で16本あり、咬耗があまり進んでいない（Martin 0～2度）ことから、壮年のものと考えられる。

玄室中央奥手には、上顎・下顎が鉗合した状態で検出されているが（No.2）、風化が進んでおり、歯牙が13本確認できたにすぎない。これらの歯牙は上下の小臼歯、大臼歯などからなる。咬耗はほとんど認められず（Martin 0度）、臼歯の歯根も未完成であることから判断して、10才程度の子供の歯牙であると考えられる。また、この近傍からは子供の上腕骨（No.2）も検出されている。

本横穴からは、他に長管骨片（No.3）、骨片（No.4）が検出されているが、細片化しており同定にたえない。

4) 岩屋口南Ⅲ区1号横穴

玄室内より2本の長管骨が検出されているが、風化が著しく部位を同定することはできなかった。

稿を終わるにあたり、本横穴の人骨及び獣骨の検討の機会をいただいた関係当局に御礼申し上げる。なかでも、島根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センターのト部吉博、大庭後次の両氏には、骨取り上げをはじめ人骨の検討にあたって種々の御教示を得た。記して御礼申し上げたい。

要約

- 1) I区1号横穴の玄門から、サルボウガに混じってウシ左中足骨1点、ウシと思われる左蹠骨片と大腿骨片が検出された。
- 2) 岩屋口南Ⅲ区2号横穴から、青年～壮年前半の女性、壮年男性（？）、10代後半の女性、性別不詳の年少者、性別・年令不詳の成人1体の合計5体の人骨が検出された。
- 3) 岩屋口南Ⅲ区3号横穴から、性別不詳の壮年人骨2体、6～11才の子供1体、10才程度の子供の合計4体の人骨が検出された。
- 4) 岩屋口南Ⅲ区1号横穴から人骨が検出されたが、風化が著しく同定は不可能であった。

岩屋口南遺跡から出土した子持ち勾玉の石材について

三浦 清

やや軟らかい灰緑色を呈する岩片である。一見して変成岩らしい岩石である。

粒子成分	微粒 1	微粒 2
SiO ₂	29.16	30.77
TiO ₂	0.09	0.00
Al ₂ O ₃	16.17	17.03
FeO	10.08	7.13
MnO	0.26	0.21
CaO	0.00	0.04
MgO	25.47	28.74
Na ₂ O	0.75	0.93
K ₂ O	0.00	0.00
P ₂ O ₅	0.05	0.00
S	0.03	0.00
H ₂ O	17.94	15.15

表 2 岩屋口南遺跡出土子持ち勾玉片の岩粉分析値 (EPMA)

試料箱に保管中に残された岩粉について E P M A 分析を行ったが、電顕下における微粒子=試料の組成を表 2 に示す。

この値は、殆ど純粋な緑泥石に近い近い値である。

この結果から著しく緑泥石化した緑泥石片岩を材料としてつくられているものとみられる。

すでに筆者によって公表された試料の中にこれに極めて類似する例がある。斐伊中山古墳から出土した管玉がそれで、この微粉の分析値を表 3 に示す。この試料は、X 線回折可能な岩粉を残していたので、X 線分析を実施したが、これを表 4 に示しておく。これは、X 線的に緑泥石とわずかに石英 (q) を含むものである。

未公表であるが、松江市乃木二名留古墳から出土した子持ち勾玉の岩粉や白玉の岩分の化学分析値もこれに近いもので、X 線回折実験でも緑泥石であることを示す。

このような岩石に対して、これまでしばしば滑石であろうと言われて来たような事実があるが、以上のように著しく緑泥石化した泥石片岩と称すべきものであろう。X 線的にも化学分析値からも滑石分子は見あたらない。ただ原石の産地と言ふことになると明らかではないが、三郡変成岩の中の緑泥石片岩の中に、このような緑泥石化の著しい部

	11	11	11	17	17	13	13	13
	管玉							
SiO ₂	30.19	28.73	29.06	30.48	26.35	31.51	31.35	31.98
TiO ₂	0.00	0.00	0.00	0.00	2.62	0.00	0.00	0.04
Al ₂ O ₃	20.93	20.88	23.57	17.78	15.78	19.44	19.47	17.41
FeO	5.10	5.09	4.25	10.73	9.91	5.81	5.04	5.35
MnO	0.11	0.11	0.09	0.10	0.13	0.22	0.27	0.16
CaO	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
MgO	30.06	28.62	29.30	25.78	22.81	29.70	30.33	30.83
Na ₂ O	0.81	1.04	0.93	1.03	0.75	0.97	1.14	1.06
K ₂ O	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
P ₂ O ₅	0.00	0.15	0.06	0.06	0.10	0.04	0.02	0.14
S	0.00	0.03	0.05	0.03	0.06	0.01	0.02	0.04
Cl	0.00	0.02	0.03	0.00	0.03	0.01	0.00	0.00
H ₂ O	12.79	15.33	12.65	14.00	21.44	12.30	12.36	12.98
(計 記)	微粒 1	微粒 2	微粒 3	微粒 1	微粒 2	微粒 1	微粒 2	微粒 3

表 3 斐伊中山古墳出土管玉の化学組成 (岩屋口南遺跡出土子持ち勾玉片岩に類似)

分があるかも知れない。

子持ち勾玉など細かい作業となると確かに軟らかい岩石が加工しやすい筈であるが、ただ、水分吸収などで崩れるものでも困るわけで、そのような点からすると緑泥石片岩などは適当な岩石なのかも知れない。

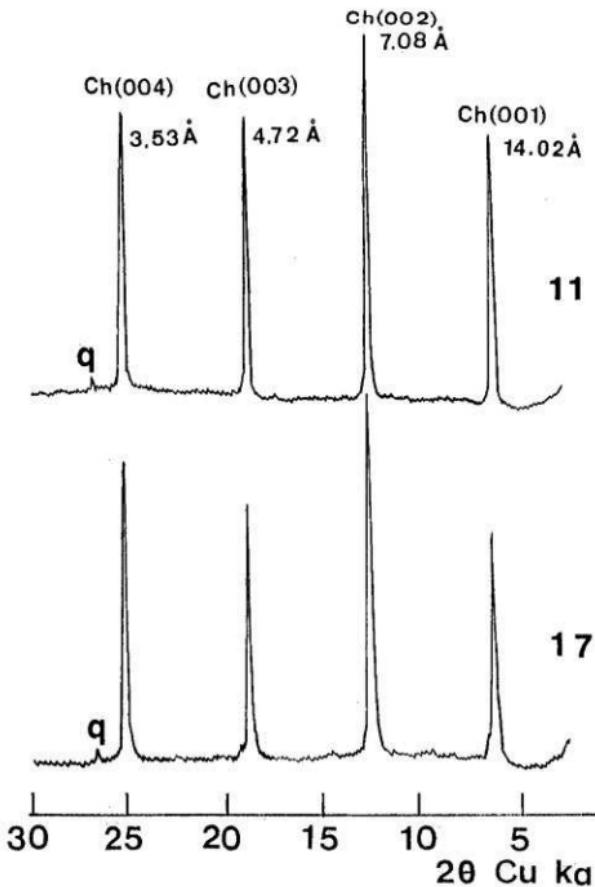


表4 斐伊中山古墳出土管玉岩粉のX線回折 Ch = 緑泥石、 q = 石英

第6章 まとめ

今回の調査で、検出した集落跡と横穴墓について確認し得た点を若干述べてまとめに代えたい。

1、集落跡

集落跡は、調査年次の関係で調査区画が別になったが、本来同一の谷に位置するI区とIII区（第3調査区）の西に開く谷部、II区、III区の第1調査区、第2調査区で確認された。地区ごとの遺構をこかいつまんで紹介するとI区とIII区（第3調査区）の西に開く谷部からは、古墳時代中期から後期にかけての堅穴住居跡と古墳時代後期から平安時代にかけての掘立柱建物跡が多数検出された。II区の南に向く斜面からは、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡が検出された。また、III区の第1調査区の尾根部と東斜面からは、保存状態は良くなかったものの弥生時代後期の掘立柱建物跡と堅穴住居跡が、東斜面からは、古墳時代後期から奈良時代にかけての掘立柱建物跡が、第2調査区からは古墳時代後期以降の堅穴住居跡と掘立柱建物跡が検出されている。

以下、特筆すべき1、2の点について述べておきたい。

I区とIII区（第3調査区）の西に開く谷部からは、14棟の堅穴住居跡を検出することが出来たが、この内、建て替えを含めて8棟がI期の須恵器を伴う古墳時代中期の堅穴住居跡であった。今回の調査では谷の上部にしか調査範囲が及んでいないため、谷全体ではもう少し堅穴住居跡の数が増えるものと推定される。I期の須恵器が出土した堅穴住居跡は、長曾遺跡⁴¹、門生山根遺跡⁴²が挙げられる。隣の鳥取県米子市では青木遺跡D地区でI期の須恵器を出土する堅穴住居跡群が存在する⁴³。門生山根遺跡は、門生古窯跡群⁴⁴の中と表現しても良いところに位置しており、比較の対象とは成り得ないが、当遺跡の須恵器の出土状況は異常とも思える多さである。この中には、少なからず門生古窯跡群産と考えて良いものもある。

次に、III区の第1調査区東斜面掘立柱建物跡からは、スラグや鉄片が検出されていたが土壌のサンプリングによって鍛造剥片を検出することができ、この遺構が鍛冶遺構であったことが確認されるに至った。II区でも掘立柱建物跡からスラグや鉄鎌、炉跡とも考えられる円形の焼土が確認されており、ここでも鍛冶が行われていた可能性が大きい。

今回調査した一連の安来道路予定地内の遺跡でも徳見津遺跡、五反田遺跡において鍛冶遺構が検出されており伯太川の東岸地区に鍛冶遺構が纏まって存在していることが明らかとなった。

第2章で古墳時代中期以降の伯太川の東岸地区での遺跡数の増加に言及したところであるが、この理由として5世紀後半を画期とする門生古窯跡群の須恵器、大原遺跡⁴⁵、平ラII遺跡⁴⁶の玉作など生産遺跡の存在と6世紀後半を創業期とする鍛冶生産によって、この地域が古代の工業地帯として機能していた可能性を窺わせるものである。

2、横穴墓

横穴墓はI区とIII区（第3調査区）の西に開く谷部からI区1号横穴墓とIII区1号横穴墓が、III区第2調査区東斜面からIII区2号、3号横穴墓が、第1調査区南斜面からはIII区4号～6号横穴墓がそれぞれ検出されている。III区4号～6号横穴墓は、小型の横穴墓ないし小横穴墓であった。それぞれに墓道を有し、玄室は、不整形なドーム状を呈していた。その他の横穴墓は、いずれも、疑似四注式平入りの玄室構造を持つもので、その平面形はIII区2号、3号横穴墓が圓角方形、I区1号横穴墓と

Ⅲ区1号横穴墓が長方形であった。時期は、Ⅲ区2号、3号横穴墓が山本編年のⅢ期、I区1号横穴墓とⅢ区1号横穴墓が山本編年のⅣ期と考えられる。

I区1号横穴墓は、既に盗掘を受けていたが、盗掘を免れた玄門部から大量の赤貝と牛骨片が3点検出され注目された。これらは、出土状況から見て後世の廃棄とは考えられず、死者を送る葬送儀礼用に供献されたものと考えられ注目された。

このような貝の横穴墓への供献は、その量の多さは別にしても、島根県において海士町滝ノ上横穴墓²⁷から巻き貝が、知夫村御崎5号横穴墓²⁸から鮑が出土している。また、牛の供献については、大分県幣旗邸1号墳²⁹などで類例を確認することができる。

角田誠一³⁰は、韓國慶尚北道で発見された「冷水新羅碑」碑文などから5、6世紀の新羅において「牛を殺し天をまつる」儀式が流行したと考えている。また、韓國慶州市天馬塚³¹では、牛の角が20本供献されており、I区1号横穴墓の牛骨の供献が朝鮮半島のこうした思想と同一の軸線上にあったことが推測される。

Ⅲ区2号、3号横穴墓は、未盗掘の横穴墓であったが、最終閉塞時に前庭部が埋められており、これら前庭部埋土から出土した大甕等の須恵器の複数個体が両横穴墓同士で接合できた。異なる横穴墓で須恵器が接合できた例は、大分県上ノ原横穴墓群³²、鳥取県陰田横穴墓群³³でも知られている。最終閉塞時の祭祀や被葬者の血縁関係を検討する上で貴重な資料となろう。

また、Ⅲ区1号横穴墓の前庭部も埋土されていたが、この埋土中から大量の須恵器と共にスラグが検出された。この横穴墓の被葬者が製鉄に関係していたことを窺わせる資料となった。

以上、注目される点について簡単に述べたが、古墳時代中期から後期にかけて朝鮮半島の影響が少なからず、目に付いた。今後の研究に期待したい。

註1 大森隆雄氏から教示

2 三宅博士氏から教示

3 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ C・D地区』1977

4 大森隆雄・ト部吉博「門生古窯跡群山根地区的古窯」『島根県生産遺跡分布調査報告書窯業関係』

1985年

5 島根県教育委員会『臼コクリ遺跡・大原遺跡-安来道路V-』1994

6 島根県教育委員会『平II遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群-安来道路100-』1995

7 勝部昭「海士・滝ノ上横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告第1集』島根県教育委員会1969

8 勝部昭「隱岐嶼について」『古代文化研究第1号』島根県古代文化センター1993

9 中津市教育委員会『幣旗邸古墳1号墳』中津市文化財調査報告16集1955

10 角田誠一「角杯と牛殺しの盟誓-新羅の祭天儀礼とその周辺」『考古学と信仰』1994

11 韓国文化広報部文化財管理局『天馬塚発掘調査報告書』(日本語版) 1975

12 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群I~III」「一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告(2)~(4)」1989~1991

13 米子市教育委員会『陰田』一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

図版

凡例

遺物写真の番号(○—△)は
本文中の実測番号(○—△)に
対応する。





1. I区調査前全景(西から)



2. I区第2調査区調査前近景

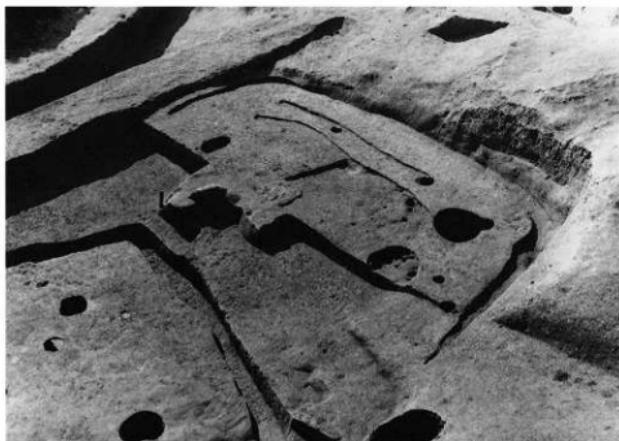


3. I区第1調査区完掘状況
(北から)

図版2



1. I区SI01、02、03全景
(北東から)



2. I区SI01近景(北東から)



3. I区第1調査区土層堆積状況
(南から)



1. I区S101遺物出土状況
(上層)



2. I区S101遺物出土状況
(下層)



3. I区S101セクション

図版4



1. I区 SI01全景(南から)



2. I区 SI02全景(南から)



3. I区 SI02検出状況(北から)



1. I区S102遺物出土状況



2. 同、遺物出土状況



3. 同、遺物出土状況

図版6



1. I区SI03全景(北から)



2. 同、全景(南から)



3. 同、セクション



1. I区S103遗物出土状况



2. 同、遺物出土状况



3. 同、整体溝内遺物出土状况



1. I区SI04全景(東から)



2. 同、セクション



3. 同、主柱穴土層断面



1. I区S105全景(東から)

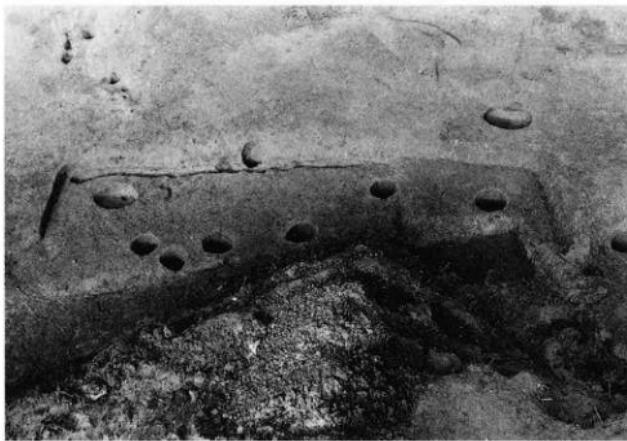


2. 同、セクション



3. I区S106全景

図版10



1. I区SI07全景(南から)



2. 同、掘り下げ状況



3. I区SI07~11全景



1. I区SI12全景(南東から)



2. 同、掘り下げ状況(南から)



3. 同、セクション

図版12



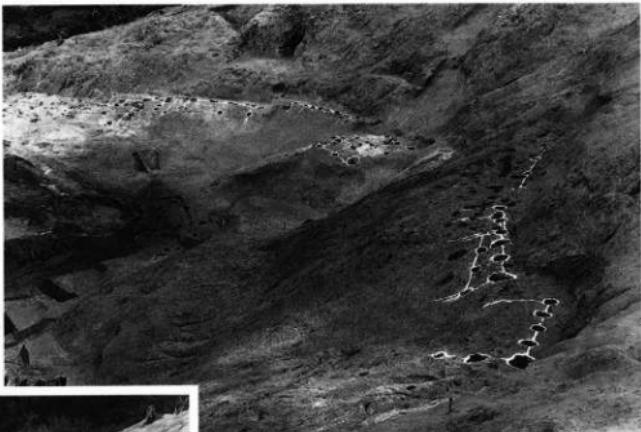
1. I区SB01全景(北東から)



2. 同、セクション



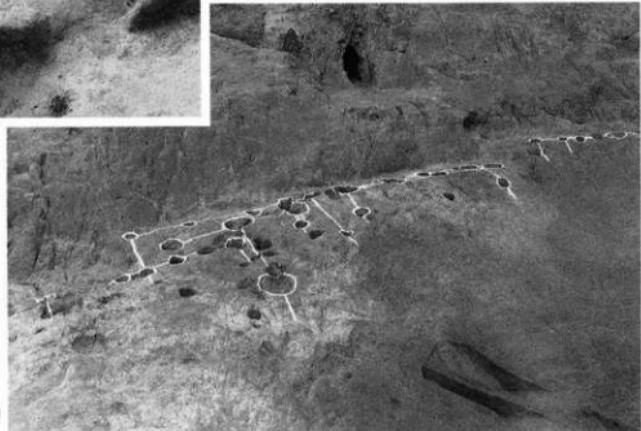
3. I区SB04遺物出土状況



1. I区第2調査区西側全景
(東から)



2. 同、(南東から)



3. I区 SB04全景(南から)

図版14





1. I区SB04全景



2. I区SB05全景
(南から、右はSB17)

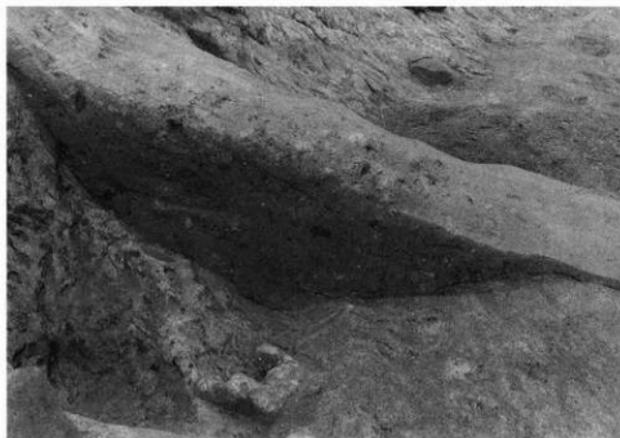


3. 同、近景(同)

図版16



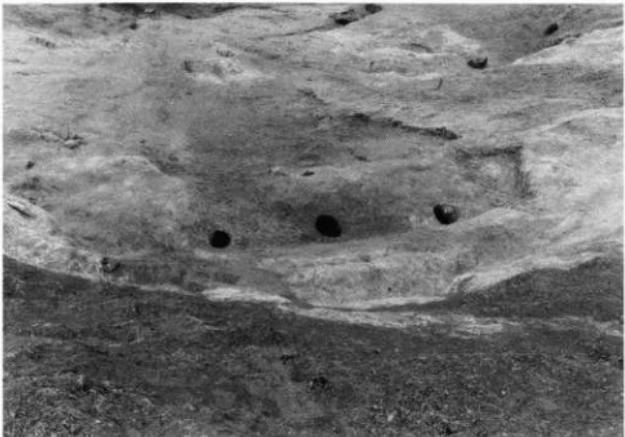
1. I区SB05セクション
(東から)



2. 同(西から)



3. 同、近景(北から)



1. I区SB06全景



2. 同、掘り下げ状況(北から)



3. 同、(南から)

図版18



1. I区第2調査区東側全景
(手前からSB08、13、14)



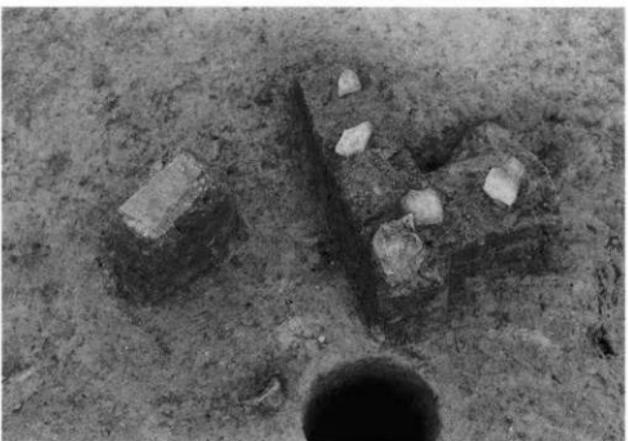
2. I区SB08セクション
(南側)



3. 同、セクション(北側)



1. I区SB 08遺物出土状況



2. 同、遺物出土状況

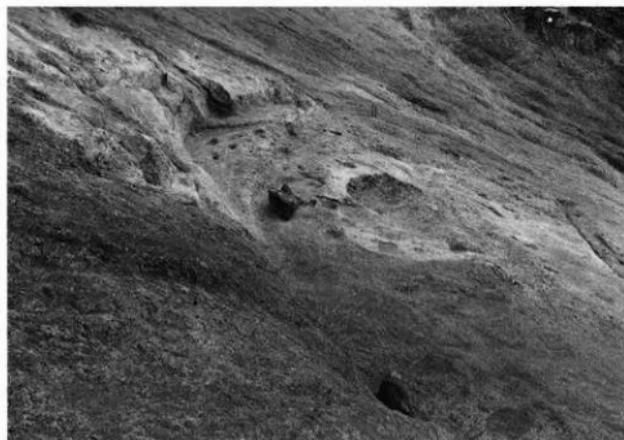


3. 同、遺物出土状況

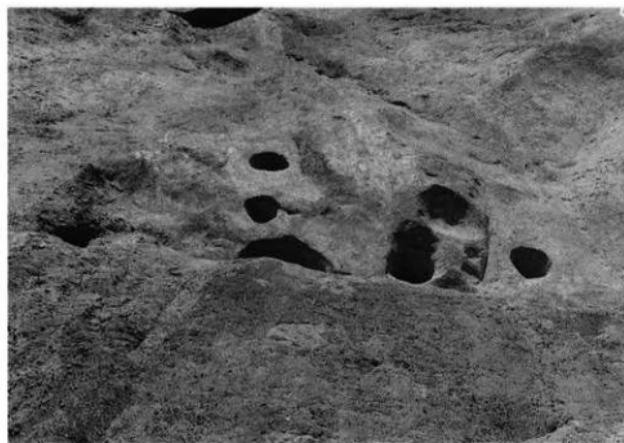
図版20



1. I区SB08掘り下げ状況



2. 同、全景(南東から)



3. I区SB12全景(北から)



1. I区SB12セクション



2. 同、全景(東から)



3. 同、全景(西から)